ぶちええ農村

のんた総集編

未来へのベクトルを手にするために

ノンフィクション作家　石井里津子

やまぐちの「農の偉業」探訪 全10話

入選作品のご紹介

食料・環境・ふるさと写真コンテスト

未来へのベクトルを手にするために

ノンフィクション作家　石井里津子

２０２５年春、26年間続いた山口県地球人会議の解散とともに、山口県下の農業農村の魅力を発信してきた広報誌「のんた」も最終号を迎えました。そのラストの10年間、わたしは「やまぐちの『農の偉業』探訪」と掲げて、県内の農地を紹介する取材記事を手掛ける機会に恵まれました。

農地（地域）を取材して記事にする作業とは、実は「農地や地域に潜む目には見えない大切なもの」を「見える化」していく――そんな行為です。

農地や地域に潜む大切なものとは、その地域の核ともいえるものですが、これは実態がなく、目に見えないのです。

もちろん読み物に仕上げようとしているわたしの目にも。最初は。

見えないながらも、土地改良区の理事長さんなど地元に詳しい方々に案内してもらいながら現地を歩きます。

水源を確かめ、水にまつわる慣習や神社など文化的な存在の背景を知り、地形や地質とともに水路や受益地である田んぼを理解して、歴史や変遷をつないでいき、人々のネットワークや新たな挑戦など、地域を多面的に見て、話を聞いていくと……。

見えない何かが少しずつもやもやっと浮かび上がってきます。

その農地の地形や歴史だけでなく、人々の言葉や佇まいも含め、そこで生き抜いた人が代々築いてきた農村風景のなかに、今もこの地を守ろうとする人のなかに、遠い過去の向こうから受け取ってきた何かを探すのです。

同時に、観光写真とは異なる美しさを見せる農村風景の切り口などを探し、それも撮影しながら……。

さらに取材後はひとり孤独に、文献も調べながら、ああでもないこうでもない、と歴史等を確かめ、じっくり考え、言葉を探しながら地域を感じ直していきます。

そうすると、ようやく何かが立ち現れてくるのです。

もやもやをなんとか掴み取り、言葉を与え、「見える」ようにしていく――。うまく伝われ～と願いながら。

30年近く農業農村を取材してきて、農地を守ろうとただ声高に叫んでも、その価値をうまく見える化できなければ、多くの人のこころには届かない、と痛感します。

田んぼをはじめ、この国の農地は、食料を生み出すだけでなく、たとえば、災害を乗り越えて自然の営みを利用する知恵や、不屈の精神も刻み込んでいます。それらが、目には見えないけれども現代のわたしたちをも支えているのです。

見えないものを見るためには、何か手がかりになるものが必要ですし、その一つが言葉であり、土地の物語なのだろうと考えています。

これから取材をして話を聞く方々が語る言葉のなかに、これまでのように、遠い過去から吹いてきたかのような風や風土に刻まれた思いが含まれているのか、それはわかりません。

ただこの10年、やまぐちの各地では、そんな風が、人のぬくもりも香りも含みながら吹いていました。

日本各地で農地が荒れ、人が減りゆくなか、「やまぐちの『農の偉業』探訪」で出逢った方々は、農地や地域を守る情熱があり、先人が築き上げた農地からの恵みのありがたさを知っている方々でした。

そして、それをしかと教えてくれたのです。

山口県は広く、県内の農地は、日本の縮図だとも感じる一方、すみずみまで切り拓かれた田んぼや、近世から昭和へと続く開作（干拓）など、農地拡大に対する凄まじい執念を見ることができます。その執念によって蓄えられた力が明治維新への道を支え、その歩みが風景に残っていると気づきます。

日本全体を見ると、わたしたちは、近代化、太平洋戦争、高度経済成長……といった時代変遷のなかで、「場の記憶」ともいえる「農地の物語」の継承をうまくできずにきたのかもしれません。

だからこそ、すべての農地を、未来に向けて価値ある存在として物語る視点や構成力が今、求められているように思います。

個々の農地の変遷のなかに、時代時代における有機的なつながりを見いだし、人類史的な大いなる価値を今一度導き出す必要があるのではないでしょうか。

◎

本冊子は、２０１５年からの10年、その時その時のやまぐちを生きた人々の生の声も記録しています。内容は、総集編作成にあたって加筆修正はせず、発行当時の初出のままであることをご了承下さい。

過去が、これからわたしたちが向かうべき道を照らしてくれるはずです。農地は、それだけの厚みを持っています。それが、道標ともいうべき、未来へのベクトルを与えてくれるでしょう。

「やまぐちの『農の偉業』探訪」で取材できていない場所はまだまだあります。この続きは山口県が発行する新たな広報誌「ぶちええ農村」でお届けできる予定です。

これからもご一緒に、誇るべき、やまぐちの農地をわくわくしながら歩きましょう。

農地は、先人たちからの、今を生きる一人ひとりへの贈り物なのですから。

プロフィール◉石井里津子（いしいりつこ）
近著は『米粉はミライ！　日本の食と農を拓く挑戦物語』（旬報社刊）。山口県見島の田んぼの謎を追いかけた『千年の田んぼ』（旬報社刊）は第64回青少年読書感想文全国コンクール中学校の部課題図書に選定。ほか、山口県の干潟が舞台の『うちにカブトガニがやってきた!?』（Gakken刊）等、里山里海を取材し、だれもが読めるノンフィクションを手掛ける。２０２０年からは日本の農業風景カレンダー「天地の農（あめつちのみのり）」（国際カレンダー発行）の12ヶ月分の詩文も執筆中。

もくじ

contents

未来へのベクトルを手にするために　ノンフィクション作家　石井里津子　1

百年千年、百個千個
～やまぐちの「農の偉業」探訪～

やまぐちの「農の偉業」探訪

①山口市　名田島　見よ。開作の軌跡を！　この地で花開く農業を！　2015年度　17号　3
②宇部市　御撫育用水　萩藩撫育方のロマンが抱え育てた開作地の上で　2016年度　18号　8
③防府市　防府総合堰　佐波川・総合堰の用水よ、防府平野の飲み水を育み巡れ　2017年度　19号　11
④萩市　福栄４台　４つの溶岩台地に描く、農の夢「ブルースカイヒルネットワーク」　2018年度　20号　15
⑤山陽小野田市　寝太郎堰　長寿化時代を人々とともに生き抜く「寝太郎堰」　2019年度　21号　21
⑥山口市　阿知須ため池群　ため池ネットワークがつなぐもの　水、地域、そして過去も未来も　2020年度　22号　27
⑦萩市　見島　国境離島・見島の田んぼとため池と見島牛と　2021年度　23号　33
⑧美祢市　秋吉台周辺　「里山」というカルスト台地のもう一つの顔　草刈り場、ドリーネ畑青い池の「やた」……　2022年度　24号　39
⑨岩国市　錦町向峠（むかたお）　山際を走る水路が村を育む　向峠神楽の弾ける夜に　2023年度　25号　45

入選作品のご紹介　食料・環境・ふるさと写真コンテスト　2024年度　26号　51　57

◉巻頭特集〈寄稿〉

百年千年、百個千個
～やまぐちの「農の偉業」探訪～

ライター　石井里津子

日本全国の農村を取材するようになって、約20年が経つ。その間、山口県の農村にも少しずつ出会ってきた。あまり声高に語られはしないが、やまぐちには、百年千年の営みの蓄積である「農の偉業」がいくつもある。それらは、ひっそりと佇み、日常の風景のなかに溶け込んでいる。だが、その偉業を紐解くと驚きの連続だ。

そんな、やまぐちの風土が生んだ営みを今一度見てみよう。そこには、変わりゆくものと変わらないものがある。わたしたちはこの2つの力をうまく操らねばならない時代に生きている。そのベクトルの力加減を間違えば、百年千年分の営みの蓄えを潰してしまうことにもなりかねない。

さあ、やまぐちの農村へ。百年千年、百個千個――ここには、そんな桁違いの話がある。

山手から久賀の町を見下ろす。8月のみかん畑は、袋をみかんにかぶせてもいた

千を超える周防大島の水洞と横穴

瀬戸内海に浮かぶ金魚の形をした島、周防大島。ここに巨大な石積みの偉業がある。旧久賀町にある「水洞」と「横穴」だ。これらは、棚田を潤すための暗渠なのだが、ここではそれらのほとんどが高い石積み技術を誇る。そして造られた取水口の数、旧久賀町だけで約1、400個（＊1）。千を超える驚きの数は日本最多。人口が増加した江戸後期から明治にかけて、標高550メートル辺りまで石積み棚田が島の北東側一帯に拓かれた。と同時に水洞や横穴も随所に築造され、ここに優れた石積み文化が花開いた。今、その棚田の多くは、みかん畑へと転換し、石積みの多くも木々の中で、一望できない。

久賀の西部に位置する庄地の水洞

さて、「横穴」は、ほかの地域では「横井戸」ともいう。かつて1998（平成10）年、周防大島へ棚田の実態調査で訪れたとき、久賀町ではないが、実際に横穴を掘った経験を地元古老から聞く機会があった。父親が山をトンネルのように奥へと掘り進め、子どもの自分は穴の中から土を運び出したという。海から拾ってきた貝殻に油を入れ、そこに紐を入れて火を灯し、明るくしたのだとか。そして、水脈にあたるまで掘り進んだ。

そして、より大規模な石積みの暗渠が「水洞」である。類似したものが大阪能勢にあるというが、ここまで大規模に展開している場所はほかに聞かない。水洞は、谷川の上に石を組むことによって、耕地と水路の両方を確保したもの。まさに、石の技術の結晶。谷川に石で蓋をして、その上に土を盛り、農地を拡げている。最も大きい水洞は、旧久賀町畑能庄にあり、長さ約600メートル。この間に農地（かつては棚田）が38段あるのだという。

久賀の石積み棚田の中へ足を踏み入れてみる。斜面は急で、石積みの高さは人の背よりも高い。大きめの石が地面に対し垂直に近い形で組んである。取水口は人が腰をかがめて入れるほどの大きさのものもある。奥をのぞくと、水洞の中にも上の棚田を支える石垣が組んであるためか、1段ごとに行き止まりのように見えた。

資料で確かめると、田んぼに入れる水は、水洞の中にある石垣の中段に「竹や棕櫚（しゅろ）、檜をUやVの字型にくりぬいた樋」をかけることで導水している。こうした「水洞」や石積みの「横穴」は、周防大島のなかでも旧久賀町に集中しているという。なぜか――。

畑能庄の水洞は、集落のなか
民家の下も通っていた

水洞の取水口

そこには「久賀の石工」と言われた地元の人々の存在があった。周防大島出身の、日本が誇る民俗学者、宮本常一は、地形や地名からこの地で中世に砂鉄掘りが行われ、その技術が生かされたのではないかと推考している。『山口縣久賀町誌』（昭和29年）（宮本常一が編集監修）には、これらの技術はすでに元禄の頃（1688～1704年）、港の潮留めの石垣を中心に行われるようになったとある。そして、久賀の棚田と石工についてこう記述している。

「久賀町の背後平地より山の中腹に至る美事な棚田は全くこの亀の甲積によって行われて居り、それは久賀町の一つの偉観でさえある。このような技術が幕末から明治にかけて、中国地方西部・北九州山間の村々を畠から水田稲作にきりかえてゆく。

土工（石工）たちは四～五人でくんで、正月すぎから五月頃までそれぞれ仕事に出かけてゆく。山口県下一帯、北九州にかけてである」

久賀の石積みをはじめ、全国の石積みの農地には、「魂」とでも言うべき、「思い」が刻まれている。その驚異的な労働力と執念がまるでそこに今も残り、わたしたちに多くを語りかけてくる。人は自分のためだけに、こんな驚異的なものを造ったりはしない。こんなに頑張れない。子や孫のため、この地が未来永劫続くよう、ここでみんなが生きていけるよう……深い祈りにも似た一念で築かれている。

石積み棚田の風景は、わかりやすくこのメッセージを伝えてくれる。石積み風

景に限らず、農村風景はどこも、その地で生きていくための願いそのものを具現化している。こうした過去からの縦軸が農地にあると気づけば、自分がその延長線上の末裔であることがつかめ、農地が違って見えはじめる。

久賀にはかつて圧巻の棚田景観があった。そして今、周防大島は県内のみかん生産量の9割近くを占め、「みかんの島」として知られている。戦後、棚田は急速にみかん畑に切り替わった。そのみかん畑も昭和後半、時代の波に押され、現在では高齢化のなか、島の急斜面での重労働も相まって、その面積を減らしてきた。

今、島の樹園地の面積は約600ヘクタール。最盛期の4分の1を切った。高齢化率も高い。だが、周防大島には島の風土に魅せられた移住者も増えはじめた。6次産業で島の豊富な柑橘類を生かしたジャム屋も全国で評判を博し、若手の就農者も増えている。次の時代の豊かさが、ローカル地点から創られはじめている。

石積みの技術は巧妙で、法面を歩くための足場が見事に組み込まれている

見島の百個もの三角ため池

次は、日本海を北西へ高速船で70分ほど渡った見島（萩市）の話である。見島は「牛の形」と言われるが、見島牛でも知られたところだ。

10年余前、はじめて見島に向かった際、意気揚々と船の前頭部分の席に座った。これがいけなかった。ひどい船酔いに苦しめられることになる。最も船酔いをする席に座ってしまったのである。あとから地元の人に教えてもらった。「船底にある座敷の一番後ろで、横になって寝ているんです」と。

見島は、朝鮮半島に近く、大陸貿易や海防の要所として古くから栄えてきた。島には、7世紀の防人の墓も漂流者の墓も、鯨の塚もあり、古来脈々といのちをつないできた島だ。

周囲18キロメートルと大きくはない。1、000人ほどが暮らすというが、昭和30年代には3、000人を超える人がいた。そして、1716（享保元）年の記録ですでに人口は、1、627人。江戸初期に、これだけの人を食べさせることができた島である。

なだらかな島の山にはすべて、棚田（地元では「段飾りの田んぼ」と呼ぶ）が切り拓かれ、島の南東に一箇所、海に面して広がる不思議な平坦地の田園地帯がある。小さな島で、これだけの平坦地があるのはめずらしい。しかも地名は「八町八反（はっちょうはったん）」。8・8ヘクタールの意味だ。実際は12ヘクタールほどあるそうだが、かつては海で埋め立てられたと語りつがれている。

1739（天文4）年の「見嶋郡絵図」にはこの地が田んぼとして描かれ、約120年後の1856（安政3）年の絵図には「八町八反」という文字がはっきりとある。だが、干拓の記録も逸話もなく、謎は残るままだ。

宮本常一は1960～62（昭和35～37）年に見島も踏査している。その中で八町八反の辺りを指し「もと入江になっていたものと思われるが、（中略）そのうち地震、台風などの影響によって入江の口の砂洲が入江をふさいでしまうようになり、砂洲の内側は水田として開かれ、漁民は現在の浦へ移動してきたのではなかろうか」と推測している。

見島には高い山も、大きな川もない。そして八町八反には、水路がない。水はいったいどこからくるのであろう。田んぼのなかに足を踏み入れて、田んぼの様相が今まで見たこともない風景であることに驚く。そこら中に小さなため池があるのだ。360度、ぐるりと目に飛び込むだけでも10個は数えられる。

小さく、深い。しかもその池の内側は、浜から拾ってきたことがわかる丸い石で固められ、独特の景観を作っている。しかも、この小さなため池はどれも三角形。水面は、当然田んぼよりもずっと低い。どうやって水を田に入れるのだろう。八町八反で耕作する人に話を聞いた。

「今は、ポンプでここから汲み上げますけど、昔は人力です。夫婦2人で水を汲み出すんです。水汲み桶の両方に縄をつけて、こっちとそっちで引っ張りながら、池から水をかきだすように汲み上げる。だから、水を田んぼに入れやすいように池に角を造ってある。ほら、どの池も三角でしょう」（2004（平成16）年採録）

どれもこれも三角。角が3つ。そのどれもが湧き出る地下水と天水を溜めているため、水は濁らず、青緑に澄み切っている。子どもたちは、親が働いている傍らこの池で泳いで遊んだと聞いた。

最近の八町八反の写真。山口県萩市提供

見島、八町八反の三角のため池。
池の側面をぐるりと固めた丸い石は白く、
青く透き通る水が映えていた

ちなみに、八町八反の田んぼ1枚の大きさは、1～2反（10～20アール）程度。1枚に付き1個、必ずため池があるという。2004（平成16）年当時、30戸の農家がここを耕し、1軒で4～5個のため池を持っているというから、八町八反には、百個とはいわず、120個、ともすれば150個ものため池があるようだった。

今以て、見島以外で三角の小さなため池がいくつもある風景を見たことがない。現在も八町八反は耕作され、ため池は健在だと聞く。近々、見島へ行って、三角ため池を確かめてこよう。今度は、船底で横になりながら、向かうのだ。

千を超える向津具（むかつく）半島のため池群と棚田

向津具半島にもその数、千を超えるため池群がある。本州最北西部、日本海に向けて鳥がぐいっと首を突き出したような形の半島、それが向津具半島だ。旧油谷（ゆ）町（現長門市）にあたる。

この半島は基部に至るまで、海岸を望むように棚田がその丘陵地一帯に約600ヘクタール拓かれている。なかでも、東後畑（ひがしうしろはた）地区は「日本の棚田百選」の一つに認定され、知名度も上がってきた。認定エリア7ヘクタールだけで210枚の棚田があるというから、600ヘクタールだといったい何枚、棚田があるのか。万単位の数字が出てきそうである。

向津具半島東後畑の棚田とため池、冬は日本海から北西風が吹きつける

東後畑営農組合代表の三村建治さん

地元、東後畑営農組合代表の三村建治さんは話す。

「開田の歴史を調べてみても、史料に何一つ残されていないんですよ。ただ、長州毛利の隠し田だったと言い伝えられています。これだけのため池と田んぼを造成するのには、大きな資本と大勢の人が動いているのは確かです」

旧油谷町は、向津具半島の基部までを占めているが、1987（昭和62）年に町のため池総数は1、787か所。うち9割近くが向津具半島エリアに集中している。当時、このエリアの水田面積は約1、005ヘクタール（＊2）。そして2010（平成22）年、ため池総数は1、412か所。田・耕地面積784ヘクタール、ちなみに農家戸数は649戸（＊3）。農家戸数よりも圧倒的にため池の数が多い。

現在、戸数33戸の東後畑集落に絞って見ても、もともと約50ヘクタールの耕地のうち耕作中の24ヘクタールに対し、ため池は小さなものも含めると約100個あるとか。三村さんは言う。

「旧油谷町のため池のほぼ9割が個人用の小さなため池です。旧町内で1ヘクタールを超える大きなため池は3つばかりで、その一つ、東後畑集落の『大堤（おおづつみ）』は1・5ヘクタールほど。深さは5～6メートル。かつて最も多いときで50人が利用していたけれど、今じゃ個人6人と営農組合だけですよ。

わたし自身は、田んぼ約2・7ヘクタールで8つのため池を管理しています。これは多い方です。この辺りの農家は最低でも2つ3つ管理するのが普通ですね」

そして、ため池が老朽化し、漏水等がはじまると、その水がかりの田んぼは必然的に荒れていく。今、日本の棚田百選の認定エリアのうち3分の1が荒れてきたという。だが、地元では営農組合を発足させ、耕作放棄された棚田を請け負い、米を作り続けている。さらに最近、この地域に魅力を感じて移住し農業をはじめる若い人も出てきた。そして、県内の大学生たちも手伝いにやってくるようになった。

下関市立大学の学生たちが作成した向津具半島を案内する看板

2月上旬、向津具半島の「庚申塚」に飾られた「さるを」。一緒に細い竹の先に御幣がつけてあるのは、「地神祭り」用のもの。「さるをうち」とは別の行事のものだが、近年はこの2つの行事をまとめて行うところも増えたという。三村さんのところは伝統行事を残す意識が強く、地神祭りは2月後半に別途行う

「ここでは、昭和38年頃まで牛に鋤を引かせていたんですよ。牛に引かせる横棒と鋤とをつなぐのが『さるを』。1月2月に、お供え用の『さるを』と一緒に自分の家で一年分使う『さるを』も集まって作る。これを『さるをうち』ゆうんです。お供え用は実際に使うものより大きめに作る。各家5～6本は必要だったから、6軒あったらその6軒分をまとめてみんなで作って帰っていました」

集落内の、近所の小さなまとまりが一単位となり、今もみんなで祭事の「さるを」をうつ。わらを3つ編みするから最低4人は必要で、4人集まらなくなったら、この行事もできなくなるという。

「行事は残さんと集落が荒れるんですよ。こうした行事は農業をやるもんの原点。昔から水の喧嘩、道の喧嘩があっても行事の日には来る。そして行事のあとは酒を交わす。こうした場が作れないと、許容範囲が狭くなって荒れていくんです」

集落が荒れれば、田んぼも荒れる。千を超えるため池の維持は、農村コミュニティの維持と深くつながっている。伝統文化が果たす役割は、風土の奥深くで互いをつなぎあわせる地下茎のようなものだ。風土とともに生きる人にだけ与えられた特別な進化のように、見えない「根」を人々は持つ。伝統文化を介し、その根で人は人とつながり、自然とつながり、先人とつながっている。やまぐちの農村では、こうした日本人の精神の原点が日常の中にまだ、織り込まれている。

2015（平成27）年2月、ため池のそばに建つ石碑には、しめ縄がまかれ、白い御幣がはためいていた。よく見ると、ほかに細い竹筒と不思議な形のわら細工が下げられている。

三村さんにたずねてみると、「2月のはじめ、庚申塚に『さるを』を供える行事」とのことだった。「猿尾」と漢字では書くそうだが、これは、わらで編まれた民具の名称である。

向津具半島の集落は、棚田と山の中に石州瓦の朱い屋根が映え、美しかった

＊

水と土の物語は、百年千年、人がいのちをつなごうと労力を投じ、百個千個と驚異の偉業を成し遂げてきた物語である。わたしたちがこれまで、どうやっていのちをつないできたのか、それを知りうる物語だ。未来へいのちをつなごうと農地を拓き、水を届けた執念のような「希望」を農地は今も語っている。

百個千個――それは簡単に生まれる数ではない。だから、農地へ足を運んでほしい。目先を超えた何かが見えてくるはずだ。そして、わたしたちは考える。これからどう生きていけばいいのか。自分たちのベクトルはどこへ向かうのか。

その答えは、農の偉業と今の風が教えてくれるだろう。

（＊1）久賀　八幡生涯学習のむら製作パネルより
（＊2）『油谷町史』平成2年より
（＊3）山口県の農林業（農林業センサス）等をもとに県農村整備課より

■参考・引用文献：
『山口縣久賀町誌』（1951）編著：久賀町誌編集委員会
『民衆の知恵を訪ねて』（1963）宮本常一　未来社
『周防久賀の諸職　石工等諸職調査報告書二』（1981）久賀町教育委員会
『日本の棚田』（1999）中島峰広　古今書院
『宮本常一著作集17　宝島民俗誌・見島の漁村』（1974）未来社
『油谷町史』（1990）油谷町史編纂委員会
「新・田舎人」全国土地改良事業団体連合会発行38号（2004）（おじゃま島っす⑥　山口県萩市見島）／「棚田ライステラス」全国棚田（千枚田）連絡協議会発行64号（2013）（山口県長門市油谷の棚田と大学生）／「土地改良」（一社）土地改良建設協会発行289号（2015）（忘れられた大地の物語を求めて　向津具半島）の取材執筆記事を元に加筆修正

名田島の農地は約560ha。主に米麦360ha、大豆は80ha。そのほかは野菜や花など

やまぐちの「農の偉業」探訪①
山口市名田島

見よ。開作の軌跡を！この地で花開く農業を！

取材・文：石井里津子

新山口駅の新幹線口から南へ、車で5分。広大な田園地帯が山口湾に向けて伸びている。山口市名田島地区。ここは開作地だ。山口県では、干拓された農地のことを「開作」という。

名田島を含む、県内瀬戸内側の開作の歩みはすさまじい。山口湾一帯だけでもその総面積は1千haに及ぶといい、数にして30もの開作が1408年から1964年まで繰り返され、耕地は拡大し続けた。

椹野川堤防の防風林をくぐり抜け、山口市名田島を突き進む。そこには、だだっ広い空の下、米に麦、大豆、さらには山口オリジナル野菜・はなっこりーをはじめとする露地野菜やハウス栽培など、耕地利用率200％の一大農業エリアが待ち受けていた。

江戸初期に開作がはじまった名田島

「ここは、一面の田んぼの写真を撮ろうとしたら、背景にビル群が映るんですよ」

山口市椹野川東土地改良区理事長、浅原利夫さん（昭和18年生）が愉快そうに笑う。確かに、広大な田んぼの向こうに林立するマンションやビルが見える。同じ干拓地ながら、山口湾に注ぐ椹野川河口の西側、旧小郡町の市街地は都市化が進み、かたや、東側の名田島地区（旧名田島村、昭和19年に山口市）は、真っ平らな田畑の上を風が自在に駆け抜けていた。

写真左手の建屋は、名田島地区にある排水機場の一つ。「干拓地の命は、排水」。浅原さんが言う。満潮時は海抜0m以下になる。今は土地改良事業のおかげで排水ができ、大豆栽培も可能に

椹野川は開作が進むたびに長くなり、耕地は広がった。歴史を紐解けば、山口湾の開作は、毛利の殿様抜きには語れない。1600年の関ヶ原の戦いで破れた毛利輝元（てるもと）は、中国6カ国から防長2カ国へと追いやられ、当初から極度の財政難に苦しんだ。それゆえ、開作による耕地拡大が藩の命綱となる。だが、もはや内陸部に開拓地は残っておらず、もっぱら海岸線に耕地を求めた。

こうして、1610年に田畑総数4万7千町歩（ha）だったものが、明治維新後には8万町歩に達している。

名田島も江戸時代初期に開作がはじまった。浅原さんが説明してくれる。

「名田島は1626年の長妻開作が一番はじめ。小さな島を取り込んだ開作で、そこは今も島という地名が残っちょる。

その次は1650年の慶三開作。1690年に元禄開作。そのあと1774年の新開作で、うちの家は入ってきたんです。最後が昭和5（1930）年の昭和開作。大正11（1922）年から潮止め工事やって、昭和2年には入植してきちょるね」

地元は「カイサク」とは言わず、「ガイサク」と音を濁らす。

同土地改良区、河村博次常務が昭和開作の記念写真があると見せてくれた。

「開作は、まず堤防を築くことからはじまるんです。潮止めです。海に堤防を造って開作予定地を囲む。樋門を造り、干潮のときにどんどん排水して水を抜く。こうして土地ができていった。山を削って、土を入れたわけじゃないです」

新たに沖に広がった昭和開作によって、江戸時代の新開作で造られた堤防と樋門は海から遠ざかり、お役御免となった。

大正14年5月16日　潮止協賛会発行の『県営小郡湾干拓潮止記念写真帖』より。「県営小郡干拓土工状況」（所有：山口市椹野川東土地改良区）

見下ろせば壮観 国指定史跡・南蛮樋

この古い樋門「南蛮樋（なんばんひ）」が、国指定の文化財になっている（平成8年指定）。排水用の人工河川・中川の河口にある。逆三角形をした遊水池の向こうに、長さ1・2kmもの堤防が東西に延びている。

堤防に上がると、その道幅の太さに驚いた。8mほどはありそうだ。湾とはいえ、海から耕地を護るにはかなりの厚みが必要だったのだろう。それを堅牢な石積みで固めている。その高さは人の背を遙かにしのぐ。

史跡の看板前で。「周防灘干拓遺跡　名田島新開作南蛮樋」が史跡の名称。1996年、山陽小野田市「高泊開作浜五挺唐樋」とともに国史跡に。1774年12月に竣工した堤防と2つの南蛮樋（三挺樋、四挺樋）、そして2ヵ所の排水用招き樋、内水樋門のほか遊水池（汐廻し）が、遺跡として指定

「こっちが三挺樋（さんちょうひ）やね」

浅原さんが、堤防のまん中あたりまで進んで見下ろし、指をさす。堤防が切れ、大きな石柱を幾本も渡した橋がある。そこが樋門跡だ。近づき、のぞいて驚いた。

椹野川寄り（西）から堤防を歩き始めると、まず三挺樋があった。古い絵図からかつては樋守小屋もこの堤防の東にあったことがわかっている

花崗岩の巨大な切石を組み合わせた樋門壁の美しいこと。まるで城壁のような精緻さ。約40cm角で長さが2～4m以上もある石の角柱など何種類もの角材が、まるで積み木のごとく組み合わさっている。

さらに進むと四挺樋もあった。構造が違う。が、いずれも、ろくろで巻き上げる仕切り板を上げ下げし、水を止めたり出したりした。三挺は、その板が3枚。四挺は4枚。満干にあわせ、1日に4回、この板を上げたり下げたり。満潮時には海水が入るのを防ぎ、干潮時には排水を外に流した。

いずれも江戸中期の卓越した土木技術の高さが感じ取れた。切り揃えた石の角材を5mに及ぶ高さまで、横積みや谷積みで積み上げる技術。しかもびしっと面が揃う。樋門の仕切り板を通す溝枠の掘り出しもまっすぐだ。どれも人力。圧巻の手仕事だった。使われなくなって約90年を経た現在、木製の扉の姿はない。だが、壮観の石積みは、築造から約250年後の今も堂々と鎮座していた。

四挺樋。南蛮樋の建造や改修にかかわったのは、萩城の石垣・石細工を建造した山口市秋穂二島の石工棟梁である

南蛮樋から顔をあげれば、目の前に広がる農地が目に入った。荒れ地がなかった。この400年、「財力」の生み出し方は多様化した。だが、「食べる」というわたしたち人間の原点は変わらない。

名田島の開作地は、今もその大切な務めを果たし続けている。

学校給食のパンも名田島の小麦と米粉から

山口県内の公立小中学校の給食で出る「県産パン」。100%県産材料を使ったパンだ。県産小麦90%＋県産米粉10%。その原料の産地がズバリ、名田島なのだ。小麦だけでなく、名田島で製粉された米粉も年間50トンがパンとなる。

伺った12月、麦まきを終えたと話していた浅原さん。浅原さんは2011年、新開作の西地区23戸で農業法人を設立している。名田島には、集落などで立ち上げた小さな法人が9つある。法人にすれば、女性や高齢者も一緒にやっていけるという。浅原さんの法人では、時給2千円。破格の時給だ。やはり、山口県内でも屈指の農業エリアなのだ。

「農業は儲かるぞ。ええぞ！って、胸張ってもっと伝えていかないと」

浅原さんは続けた。

「名田島には、年間8万4千人が訪れる市立のスポーツ文化施設があるんですよ。これだけの人が名田島に来ちょるんです。ですから、その近くに農家レストランや直売所、農業体験など農業の交流拠点ができたら……」

昭和樋門も2006年に電動巻き上げ式のステンレス製フラップゲートに変わった。「昭和17年8月の満潮時に大型台風が来て堤防が決壊して、名田島で32名が亡くなってね。牛馬はもっと」浅原さん（写真）が説明してくれた。家の被害も約300戸、水稲500町歩全滅という大災害だった

新幹線の駅に近い一大農業エリア・名田島。地の利を生かし、農業を核とした観光名所となる日も夢ではない。今後、文化財・南蛮樋の周辺整備も進み、一般の人も安全に見て歩けるという。

名田島では、ビール用の二条麦も日本酒用の掛米も栽培されている。一面に広がる麦穂や稲穂を見ながら、その酒をぐいっと一杯……。それに、大人だって県産パンを頬張ってみたい。飲んでも食べても旨いに違いない。

主な参考文献：『史跡周防灘干拓遺跡名田島新開作南蛮樋保存管理計画策定報告書』1998年
編集発行：山口市教育委員会

取水は椹野川上流にある淋洸井堰（りんこういせき）から。寛永・万治年間（1640～1660）に築造。川の東側（写真では向こう岸・左岸）に、名田島へ流れる用水路がある。右岸側は小郡を潤す

樋門の手前には遊水池がある。この貯水スペースがあることで、排水するための水圧が確保できる。田畑の向こうに椹野川西岸の市街地が望める

◉巻頭特集

やまぐちの「農の偉業」探訪②

宇部市御撫育用水

萩藩撫育方のロマンが抱え育てた開作地の上で

取材・文：石井里津子

五田ヶ瀬井堰。1792年に築造後、1821（文政4）年に改修された。その後、昭和2年に頭首工がコンクリート化。1966（昭和41）年に頭首工電動化。2000（平成12）年には頭首工が大改修された

そこは住宅街だった。目の前をトラックが、乗用車がビュンビュン横切っていく。秋吉台周辺から周防灘へ流れる厚東川の右岸（西側）、宇部市の厚南平野を潤す御撫育用水を今日は訪ねるはずなのだが……。田んぼはいったいどこに？　新たにかけ直したという水路橋を目の前にしながら思わず尋ねた。

「農業振興地域ではないので、宅地化が進んでいるんですよ。田んぼはこの先にあります」

宇部市御撫育土地改良区理事長、浅上賢治さんが河口の方を指さした。大型レストラン、総合病院、スーパー、建ち並ぶ家々……。そのあいだを流れる御撫育用水も、排水河川・中川も街の風景に溶け込んでいた。

関ヶ原の戦い後、財政難対策として開作（干拓）を藩内各地で進めていった萩藩。厚東川河口も例外ではなかった。江戸時代後期、厚東川右岸で順次、開作が進められた。それに併せて造られた御撫育用水。約480ヘクタールの開作地に水を届けてきた。

御撫育用水ルート。
左方向が河口側。
山口県土地改良事業団体連合会作成

萩藩「撫育方」の事業として

御撫育用水は、萩藩の撫育方（ぶいくかた）によって造られた。撫育方とは、藩の財政難を打破するため創設された、知恵と技術を併せ持つ部署だったという。ちなみに「撫育」とは、武士や農民の困窮救済を意味する。辞書には「かわいがり大事に育てること」とある。

江戸時代の後半、萩藩は特別な部署、「撫育方」を立ち上げた。表向きは緊急時の財源確保だったというが、実は、藩主の私的資金だったとか。7代目藩主、毛利重就（しげたか）が、就任12年後の1763年に、宝暦検地で出た増石分を資金として創設した。そして幕末には、この撫育方の貯蔵金が倒幕資金となっていった。

撫育方は約100年のあいだに数々の仕事を手がけている。開作（干拓）、水路開削、塩田、製塩、販売。蝋燭（ろうそく）産業、さらには、製塩に必要な石炭採掘まで。

その撫育方が幕末まで抱え育てた土地。それが厚南平野だった。

現在も「御撫育」の名を残しているのはここ、「御撫育用水」のみなのだそうだ。「御」をつけ、「撫育方」への敬意や感謝の念を込めた命名だという。浅上理事長は言う。

「恩を感じてつけたんでしょうね」

御撫育用水溝筋明細図絵［1822（文政5）年］。幅40.7センチメートル、長さ28メートル。五田ヶ瀬井堰から水路のほか溝筋の田畑や木々も描かれている。五田ヶ瀬井堰を石垣作りに改修した翌年に作成。2016（平成28）年、宇部市有形文化財に指定。
宇部市御撫育土地改良区所有
管理者:宇部市、所在地:宇部市学びの森くすのき
（写真提供:宇部市学びの森くすのき）

現代を支える御撫育用水と排水河川・中川

厚南平野の開作に撫育方がかかわりはじめるのは、1782年完成の「上開作」より後である。続いて1787年に開作された「中野開作」は、完成後、撫育方に売却されている。ここから撫育方の関与がはじまっていく。中野開作の水田は83町歩。この広大な面積をため池では潤すことができず、撫育方の資金や技術を投入した用水路掘削が必須だった。

御撫育用水。山陽本線を走る列車と用水路の風景も印象的。幹線用水路は最も深い取水口のところで深さ3メートル。最も幅が広いところで3.4メートル

辰の口隧道。もともと半島であった岩盤をくり抜いた。長さ150メートル。高さ1.9メートル、幅3.7メートルもある立派な隧道だ。昭和隧道ができるまでの、1821（文政4）年～1933（昭和8）年の112年間使われた

１７９２年、御撫育用水が通水。さらに１８１７年には、御撫育方直営による「妻崎開作」２１３町歩が完成。そのため、御撫育用水は延長され、１８４５年、総距離約10キロメートルになった。

途中、岩盤をくり抜いた巨大な辰の口隧道を通すなど、その技術力は目を見張るものがある。それだけではない。厚東川の水面は、右岸の干拓地よりも高い。決壊しないタフな堤防も必要だった。

そしてもう一つ、開作が進むなか、排水河川・中川も造成された。こちらは全長約5キロメートル。もともとの厚東川の本流跡の水脈筋に掘られたものだ。この排水河川がなければ、現代においても厚南平野を暮らしの場として維持することはできない。

「ここは、厚東川よりも低い土地です。中川の自然排水だけでは追い付かないんです。厚東川河口にある中川排水機場では最近、ポンプを2台から3台に増やしました」

そう浅上理事長が話す。

住宅街の安心を支えているのは、こうした排水機能だ。つい、当たり前の風景として忘れられがちだが、生活インフラとしての土地改良施設の役割は大きい。

開作地の重要な排水河川、中川

2017（平成29）年に完成した新しい水路橋。中川の水位が上がると橋も自然と上がり、水の流れを妨げない仕組み。洪水など災害対応型だ

開作地の下に眠っていた石炭

厚東川右岸の開作は、撫育方直轄で幕末まで続いた。近世の終わり、実は撫育方がこの地に目を付けたのは、どうも米だけではなかったようだ。

「ここは、地下に炭鉱があったんです。海底炭田です。ですから掘った坑道の空間が今もそのまま地下にあって。最近でも小規模ですが、水田がぼこっと落ちたり……」

石炭の採掘は、江戸時代半ばにはすでに行われていた。石炭は、藩の主要産物の一つ、塩の精製に欠かせない燃料だった。厚南平野には、米、塩、石炭という複数の宝があったことがわかる。

とくに「妻崎開作」は、石炭採掘の目的もあり、撫育方が最初から手がけている。つまり、撫育方は地下に眠る石炭にも目を付けていたのだ。干拓すれば、海底の石炭採掘も当時の技術で可能になった。

この地の宝は水田だけではなかった。ゆえに、さまざまな業種の人々が集まってきた。それがここを商工業エリアへとしても発展させていく。

そのすべての礎となったのが、御撫育用水であり、ここに目を付け、この地を育てた撫育方の裁量だった。

「石炭があったことは、最近は知られていないですね。他の地域の炭鉱のように、ぼた山がないですから。こうした残土は、この先の工業地帯の埋め立てに使ってあるんですよ」

浅上理事長が教えてくれる。近代以降も撫育方がつくった流れが、宇部市を発展させてきた。人々は米づくりをしながら、農閑期に石炭採掘を手がけたという。石炭産業が発展していくと、石炭産業に就き、小作で田んぼをする新たな参入者も出てきた。だが今、この一帯で、石炭採掘は行われていない。

*

現在、宇部市御撫育土地改良区の水田面積は２００ヘクタール弱。80歳代、90歳代も現役だ。

「わしが死んだら誰もやるもんがおらん」

そういう人も増えた。

「ロボット投入を待っています」

浅上理事長に後継者問題を問うたときこんな答えが返ってきた。とはいえ今日のこの一瞬も、農業関係者による、御撫育用水をはじめ、排水河川・中川の適切な管理運営によって地域全体が守られている。

厚南平野に今日も新しい朝が来る。農家の田や水路の見回りがはじまる。御撫育用水の横を山陽本線が走り、トラックが荷を運ぶ。そして、学校に向かう子どもたちの元気な声。

撫育方のロマンがこの風景をつくり今も見えないところで地域を潤し続けている。

主な参考文献：
『宇部市史　通史篇』
１９６６年　宇部市史編纂委員会刊行
「厚南」厚南郷土史研究会編・発行
宇部市御撫育土地改良区作成資料

やまぐちの「農の偉業」探訪②

宇部市御撫育用水

埴安（はにやす）神社。埴安とは土地を支配する神さま。中野開作の着工にあたり、地鎮のため建立。まず神社を建て、開作がスタートした。神社の裏は、その前の開作地・上開作との境目

小島樋門から厚南平野を望む。2006（平成18）年（宇部小野田湾岸道路建設事務所撮影写真より）

浅上賢治理事長。
五田ヶ瀬井堰にあった昭和改修記念碑前で

1959（昭和34）年小島樋門大改造　上空より撮影写真より（上写真とも宇部市御撫育土地改良区所有）

新刊案内!!

石井里津子さんの新刊が出ました。山口県萩市見島にある水田から日本人と稲作の深い関わりに迫るノンフィクションです。

『千年の田んぼ　～国境の島に、古代の謎を追いかけて～』（旬報社）

◉巻頭特集

やまぐちの「農の偉業」探訪③

防府市 防府総合堰

佐波川・総合堰の用水よ、防府平野の飲み水を育み巡れ

取材・文：石井里津子

総合堰。場所は最上流部にあった「乙井手堰」の位置に設けられた。「総合堰では代かき期、毎秒4.2トンの水を出していますが、冬場はその半分以下、2トンの水量」と属さん。ちなみに、佐波川の堤防は山陰との連絡道でもあり、12世紀には重源上人が東大寺再建のために大木を求めて山口を訪れ、切り出した木材を運ぶために佐波川の流れまで変えたという逸話が残る

山口県防府市最高峰631メートルの大平山に登る。眼下に広がるのは、防府平野だ。その向こうは瀬戸内海、周防灘。平野部には、みっしりと建物が建ち並び、絶え間ない人間の営みの息づかいが感じられる。

平野部の右手（西側）に、今日の物語の水源である佐波川が緩やかに弧を描きながら、瀬戸内海に流れ込んでいる。「上から眺めると、本当に田んぼが減っているのがよくわかりますねえ」

防府平野を俯瞰できる場所を探してくれた山口県土地改良事業団体連合会の吉末さんがつぶやく。

河口域になるだろうか。霞んだ向こうに田園地帯がうっすら見える。

佐波川をさかのぼるように視線を手前に戻し、取水場所である「防府総合堰」を探す。ちょうど山の陰になって見えないが、その堰から6本の農業用水路が放射状に防府平野へ伸びている。6本の幹線は枝分かれしつつ、こと細やかに各所で水を配分する。まるで毛細血管のように平野全域を駆け巡り、水を行き渡らせる。もちろん、排水機能も兼ねながら。

さあ今回は、そんな防府平野の水に秘められたからくりを紐解いていこう。

大平山（631m）の展望所から防府平野を眺める。写真右手に佐波川が流れ、海寄りの方に田んぼが見えた。「乙井手」「青井手」「一本樋」「仁井令」「植松」「古祖原」の6本の用水路が走る

防府天満宮。JR防府駅から徒歩で20分ほど。日本初の天神様で、日本三大天神の一つ。ここから南に防府平野が広がる

干拓地・防府平野の飲み水を支える用水

「防府平野は、防府天満宮から南側に広がっていますが、もともとは半分以上が海。開作地です。江戸時代前から個人による干拓が進んでいたんですよ。

佐波川は地下に潜って、伏流水が多い川ですから、伏流水を利用し、開作地を広げることもできたんです」

防府土地改良区の理事長、属宣義（さっか・のぶよし）さん（昭和17年生）が教えてくれる。

山口県では、干拓のことを「開作」という。藩を治めた毛利家が干拓に力を入れたことで、江戸時代に広大な土地が生み出された。防府平野の開作地は、江戸時代だけで1、500ヘクタールにも及んでいる。それは新田開発だけでなく、塩田開発も行われ、数十回にわたって行われた。こうして防府平野は県下最大の平野となり、塩田跡地は工業の利用が進み、産業都市としての防府の顔をつくりあげた。

「防府平野の飲み水は地下水なんですよ。佐波川の地下浸透水を市内の複数箇所で汲み上げて、水道水にしているんです。防府市は今12万人弱の人口ですが、この飲み水の涵養に役立っているのが、総合堰の農業用水なんです」と属さんは語気を強めた。

佐波川の水が、干拓地である防府平野全体に行き渡る理由――。それは、田んぼがあり、田んぼを潤す農業用水が平野の隅々まで駆け巡っているからなのだ。その証拠に、農閑期で用水路に流す水が少ない冬期には、防府平野の地下水位は3メートルも変異するという。防府市水道局が発行する調査書物にも次のように記されている。

水道局の水源地井戸。『防府平野の浅層地下水』によると、防府平野の大型揚水井は14箇所に計66個、事業所用や一般家庭のものを含むと9,500近い井戸がある（1987年）

水路の洗い場。乙井手の一部には、かつての名残がある。家から水路に下りる階段があり、洗い場がある（トタンの箇所）。大根などの野菜も洗う生活水路でもあった

「地下水位は全般的に夏高く冬低い。この様な年変化の振幅は平野中央部の水田地帯で大きく、周辺部や非水田の防府飛行場で小さい。年変化の原因は河川水位の変化によるものではなく、水田への灌漑が主体をなしており、これによる地下水への供給量は年降水量の約1・5倍に達することが明らかになった」（『防府平野の浅層地下水』湯原浩三著　平成4年防府市水道局発行）

「それが今、毛細血管にまで水が行き届かない状況になっているんです」

属さんの顔がくしゃりとゆがんだ。

白いFRP（繊維強化プラスチック）板が水路の表面に貼られている。平成16～20年に施工。水路の両側に貼ることで抵抗値を減らし、下流まで行き届かせる対策

「田んぼの減少です。現在、ここの水田面積は400ヘクタールを切っています。防府総合堰の受益面積は、もともと1、510ヘクタールですよ。ですから、田んぼが減った今、水が足りなくなるはずはないって思われがちですが、そうじゃないんです」

住宅街のなかの田んぼを探す

水田が減ったのは、住宅等への転用が主な理由だ。「宅地が増えたために多量の水を流せない」という現象が起きている。

「水田が住宅に変わって、そこで水が止まると、さらに下流域に田んぼがあるのに、そこへ送り届ける水が足りなくなるんです」

田んぼは、それぞれが水路でつながっており、水をたっぷり蓄えては、ゆっくりと浸透させる機能を持つ。その働きが失われてしまうのだ。

「かつては見渡す限り田んぼで、春先には菜の花で一面真っ黄色でしたよ。もともと干拓地ですから家は一軒もないところ。今の住宅街の光景からは想像できないほど、辺り一面田んぼでした。

毎年7～10ヘクタールが転用されています。とくに平成に入って、見る見るうちに田んぼがなくなっていきました。この勢いで減っていくと、あと10年ぐらいで消えてしまうかもしれないですね。農家が高齢で農業の跡取りがいない。そうなると転用するようになる。代がかわると賦課金（水路などの維持管理費負担）への理解もなくて……」

属さんに住宅街のなか、水路を案内してもらいながら、田んぼも探した。「探す」

水路は工夫に満ちている。わざと水の流れを変えて、「砂溜め」（水流を緩やかにして泥を沈殿させる）を設けた箇所。水路幅を2倍にすることで流速は2分の1になる

用水路は水系ごとにあり、水系が違う2本の水路が並ぶ場所も。水路の高さもスピードも違う。防府土地改良区の属理事長が説明をしてくれる

属理事長が住宅の裏にわずかに残った田んぼへ案内してくれた。もともとはすべて田んぼだったなかで、こうして一部分だけがぽつぽつと残っている

という言葉があてはまるほど、田んぼはぽつぽつとしか見当たらなかった。

「今から農業振興地域に入りますよ。風景が一変しますよ」

河口域へと南下し市街地を抜けると、航空自衛隊北基地があり、その周辺でようやく稲穂が黄金色に輝く風景に出会えた。ここは航空法で建築物の高さ制限もあり、農業振興地域である。

「市街化区域で、水系の喉首を押さえられているようなものです。飛行場の西側の農地は露地野菜を作る人も多い。水田をするには水が足らず、畑に転換した人もいるでしょう」

航空自衛隊の基地周辺でやっと出会えた田園風景。昭和50年代に区画整理がなされている

稲刈り作業を行うご夫婦に出会った。下流域の田島という場所。ご主人は81歳。現在はかつての半分、田んぼ2枚、1反5畝ほどをやっているのだと話してくれた

総合堰と日本一の規模を誇る円筒分水工へ

取水地である佐波川へ向かった。佐波川は県内唯一の一級河川。山口県と島根県の県境、三ツヶ峰から56キロメートル、最後に防府平野の北西側を通り、周防灘へと流れ込む。「人が死ななければ梅雨が明けない」という言葉を残すほどの暴れ川だった。ダムと総合堰が整備されるまで、毎年死者を出していたという。

昭和26（1951）年10月のルース台風の被害は甚大で、佐波川にあった農業用水の堰4つが破壊。それらの古い堰は木枠石張りで、川の約1・5キロメートルの間に点在していた。新田ができるたび、堰を設けていった結果である。

台風を機に昭和26～33年、コンクリートによる近代的な堰に変え、一つにまとめた。こうして「防府総合堰」が誕生する。

そして、これまで4つの堰を利用していた6つの水系に、水を公平に分けるため、円筒分水工が佐波川脇に建設された。総合堰の円筒分水工は、現存する円筒分水工のなかで日本一の大きさ（直径）だという。

円筒の中心部に逆サイフォンの原理で吹き上げさせ、オーバーフローした水を、水田面積に応じて仕切られた円周部分に流し込み、公平に配分する仕組みだ。

総合堰も円筒分水工も山のなかにあるのかと思いきや、佐波川左岸の市街地北端部にあり、防府天満宮から1キロメートルも離れていなかった。佐波川河川敷

昭和33年に完成した円筒分水工。円の中心から水を吹き出させて、水を等しく分けている。円筒分水工は、戦前に日本で考案され、水の配分を正確にできるスタイルとして、水争い等に頭を悩ませてきた地域に導入されてきた

に設けられた分水工は、児童公園が併設され、子どもたちは遊びながら分水工を知ることができる。

「分水工の横の土手では、草そりもできるんですよ」

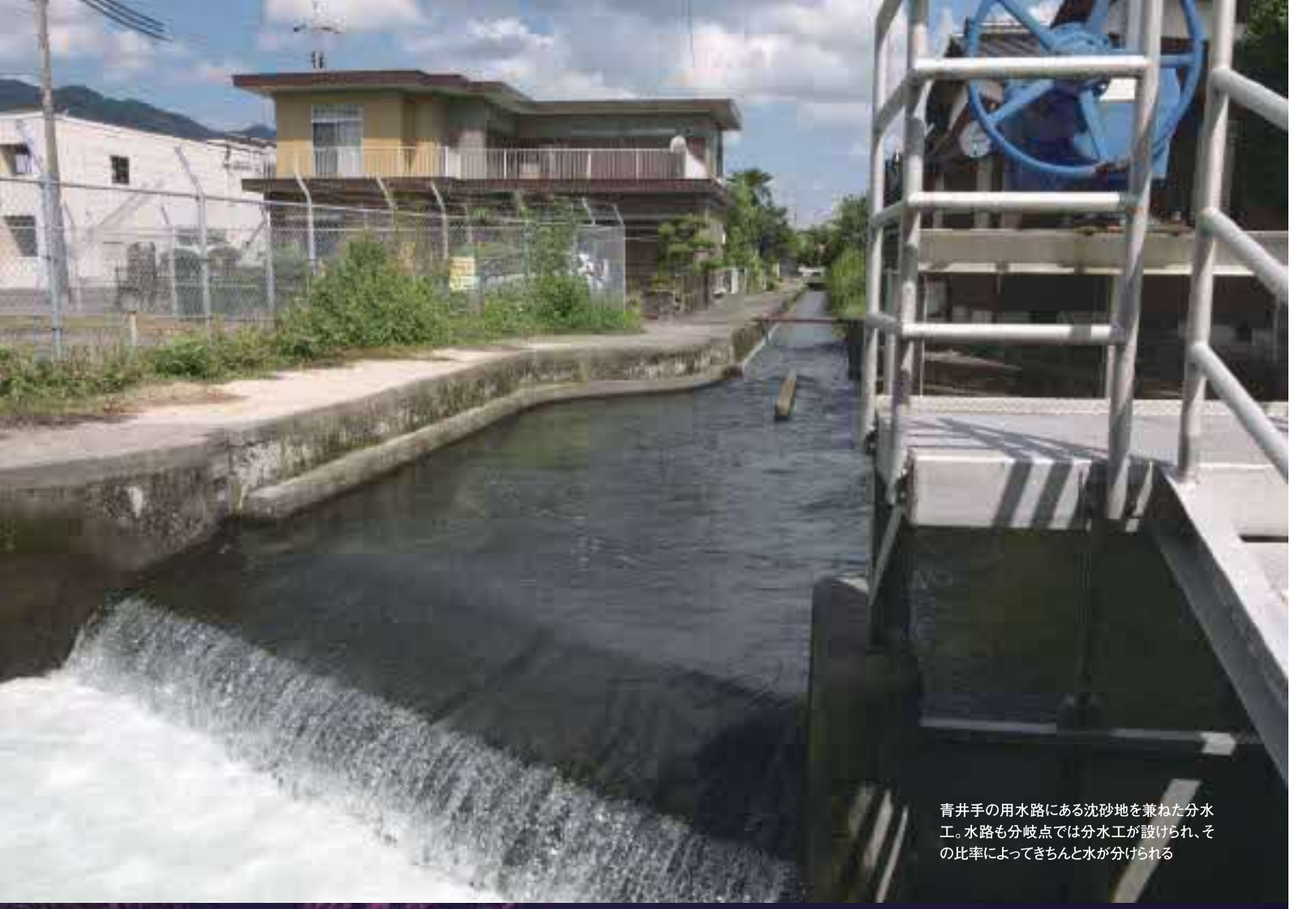
　属さんが、緑の土手を指さす。土地改良施設と公園などの文化教育施設が融合し、だれもが訪れることのできる開かれた空間になっていた。

　加えて、防府土地改良区では、分水工や用水の働きを地元小学生に教え、田植えや稲刈り体験も実施している。

　防府平野は、水田を維持することが水資源を守ることに直結している。ゆえに、水田維持は喫緊の課題だ。今後は、「教育」や健康作りなど「福祉」といった新しい目的と連携した水田保全が全国でより展開するだろう。ここはその先導的役割を果たせる場所だ。

　遊具の上からなみなみと水を送り出す円筒分水工を眺めていると、身近な問題として誰もが田んぼを見つめ直せるはずだと思えた。

参考文献：
『防府平野の浅層地下水』湯原浩三著　平成4年（防府市水道局発行）
『防府市史　通史Ⅱ、Ⅲ』平成10年（防府市史編纂委員会　防府市発行）
『防府地形の変遷』御薗生翁甫著　昭和28年（防府市立防府図書館発行）



青井手の用水路にある沈砂地を兼ねた分水工。水路も分岐点では分水工が設けられ、その比率によってきちんと水が分けられる

4～6月にピンク色にライトアップをするほか、「やまぐちピンクリボン月間」でも分水工がピンクに染まり、乳がんなどの検診をPRも。
写真提供：山口県土地改良事業団体連合会

◉巻頭特集

やまぐちの「農の偉業」探訪④

萩市　福栄4台

4つの溶岩台地に描く、農の夢「ブルースカイヒルネットワーク」

取材・文：石井里津子

「ここがまだ萩市でなく、福栄村時代にね。ブルースカイヒルネットワーク構想のもと、4つの溶岩台地をつないで、観光や体験など活性化に生かそうと考えたんですよ。道路も整備していってね」

案内をしてくれた福栄土地改良区理事長の白神崇（しらがみ）さんが、車の運転をしながら早口にそう語り、愉快そうに笑った。

――その構想はどうなったんですか？

「そのあと、萩市に合併したからね。日の目を見てない」

山口県阿武郡福栄村が萩市となったのは、平成の大合併の時（平成17年3月）だ。

「ブルースカイヒルネットワーク構想」が夢見た、4台のネットワークによる活性化は構築されぬまま時が流れた。

そもそも萩市の大部分は、火山の噴火でできた大地である。萩市北東部には、活火山である「阿武火山群」が広がり、その数約50。過去の噴火が約200万年前から約1万年前に起こり、小さな溶岩台地がいくつも誕生した。

溶岩台地は、吹き出した溶岩がテーブル状に広がり、固まったもの。そこは水さえ届けば、水田にもなり、広大な農地となった。人々は、その青き空を映す大地にどんな夢を描いてきたのだろう。

旧福栄村で現在、農業が盛んな溶岩台地は4箇所。「福栄4台」ともいわれる平蕨（ひらわらび）台、羽賀（はが）台、平原（ひらばら）台、長沢（ながさわ）台。いずれも昭和後半に水が届くようになり、農業が花開いた。白神理事長の案内で4つの台地を訪ねた。

1

平蕨台空撮。2000年頃のもの。ここの作物は美味しい。米も火山地帯特有の味で、食味の数値も高く、美味しいと評判。土壌が良いだけでなく、昼夜の温度差が大きく、甘みが違う

写真提供:萩市福栄総合事務所

2

長沢台。牧草は、イタリアンライグラス、スーダングラスを栽培。6月に蒔いて、8,9月に収穫。そして10月にもまた蒔く

3

羽賀台空撮。2000年頃のもの。標高約310m。羽賀台のすぐ下は日本海。そのため、潮風で葉たばこは傷んでしまい、不向き。かつては、ハウスでイチゴの苗栽培も。だが、県内産のイチゴ栽培の減少に伴い、3年前にやめたという

写真提供:萩市福栄総合事務所

4

平原台周辺写真。まん中の山は、紫雲山。向かって左手が平原台になる。平原台の標高は140mほど。写真に映る棚田は横貝地区

撮影:伊達千絵

平蕨台生産組合代表の藤原寿一さん。昭和49年から今日まで45年間、2代目組合長を務めた。平蕨台活性化交流施設は、農地を展望できる場所に立つ

雲海が美しい平蕨台、オリーブの産地に

萩の旧市内から車で40分。今回紹介する福栄4台のうち、もっとも山陽寄りで、山口市内から1時間ほどのところに平蕨台はある。標高350～400メートルほどに位置し、朝の雲海が美しく、知る人ぞ知るビュースポットだ。

戦後、国の開拓事業によって拓かれた。昭和26年、開拓団入植、開墾。以前からリンゴ栽培など畑作もあったが、一度、すべて国有地となり、開拓後に払い下げられた。当時、ここの飲み水は雨水。井戸も1箇所のみ。水はなかった。約10軒が入植したというが、去って行った人もいる。

昭和43～48年、県営総合農地開発事業で佐々連川より約100メートル下から揚水し（高低差、県内一）、受益地約100ヘクタールの農地が造成された。だが、昭和45年に減反政策。100ヘクタールの水田誕生を夢見ていたにもかかわらず、水田になったのは、わずかに17・5ヘクタールだった。国策を前に、地元は辛酸をなめざるを得なかった。

「とくに入植者にとっては、水田にするのが夢じゃったから」

農事組合法人平蕨台生産組合代表の藤原寿一（としかず）さん（昭和18年生）が言う。

昭和47年、生産組合を立ち上げ、キャベツ、白菜、人参、馬鈴薯などさまざまな作物に取り組んできた。過去には、葉たばこも盛んに。収穫後、白菜を作ることができ、収入につながった。葉たばこの需要が減ると、牧草栽培へ移ってきた。

今も47人が地主（5集落）だが、不在地主が多くなってしまった。もう10年で何軒残るかという状況で、組合もたたむ

覚悟をした。そんななか、大阪に本社を置く農事組合法人が入り、オリーブ栽培がはじまった。

すでに50ヘクタールほどがオリーブ畑に転じて3年目。オリーブは、採算が合うまでに10年はかかるという。オリーブの若木が、行儀良く等間隔で並ぶ一角が目に留まった。

「いずれぜんぶオリーブになるでしょう。オリーブがなかったら荒地になっていたでしょうね。父親の代には一生懸命開拓して、夜も寝んと農業をやってたけれど、若い人は……もう農地への愛着心がないんです。荒らさないために良い機会でした。地元の人間じゃなくても、農地を守ってくれるほうが、ずっとええです」

3年目のオリーブの若木。オリーブの木が成長すると、景観も変わっていきそうだ

埼玉県川越市からIターンの荻野賢二郎さん。旧福栄村の新規就農者塾に参加したことを機に2000年、34歳の誕生日、平蕨台に家族で移住。ハウスでトマトやキュウリなどを作り、露地で白菜、ブロッコリー、馬鈴薯など。環境が良く、子育てにちょうど良かったという。「農地が荒れてきたら、せっかくのすばらしい環境が台無しです。ですから、オリーブ畑へと変わっていくのも、ぼくは賛成です」と、新規就農者用住宅前で

白菜、キャベツ、ネギ……実り豊かな羽賀台

次に羽賀台へ向かった。羽賀台は、萩城まで8キロメートルといい、天保年間（1831～1845）には毛利公の練兵場にもなった。その際、毛利敬親が鞍をかけた「鞍掛松」（現在は2世）が農地のなかに今も残っている。

「昭和43年から農業構造改善事業で工事がはじまり、昭和44年に作付けがスタート。その前は、原野と畑で、スイカや大根、リンゴなどを作っていました。

昭和30年代に初代の組合長たちが、設計したら水が上がることがわかって、開拓できんかねぇと話をしていたそうですよ。そして工事がはじまったんですが、ほんの1年遅かったら、減反政策で米づくりができなくなるところでした。ここは100％水田として造成されました」

農事組合法人羽賀台共同生産組合、組合長の藤田芳昭さん（昭和26年生）が言う。

水田造成が17・5％となった平蕨台と、運命をわけた1年となった。

平成11年に組合法人を立ち上げた。年間雇用が必要になり、また米の単価が下がるに連れ、野菜の面積を増やしてきた。白菜やキャベツ、ネギなど露地物が多い。ここは冬、霜が降りる。冬時の白菜などは、自ら凍らないよう糖を出す。だから、冬場は甘みが増しておいしい野菜になる。

「米はここ2～3年、水不足。川からの揚水を一度、堤に入れますが、雨も雪も減っています。米面積はかつて30ヘクタールでしたが、20ヘクタールにし、野菜が10ヘクタールです。

1月中に出す白菜は、種は8月頭に蒔き、9月頭に植え付けたもの。羽賀台のネギは、甘く、人気

最近は霜が降りるのが遅くなり、白菜も遅く植えて遅く出荷するように変えてきた

ここは何でもできるのが自慢です。災害も少ない。野菜の評判もいい。ここの土はねばっこくて、扱いにくいけれど、肥えたらいいものができる。ただ、地下はドリーネで穴だらけ。だから地下水がなく、保水力もない。つねに水を与え続けないといけない場所です。

地主は30名ですが、不在地主が増えていて、組合員も4人。あてにしていた人が、定年後も職場に引き留められ、県内の少ない人口を取り合いっこしている感じです。孫たちの代が帰ってくるかも、と期待し、がんばっていますね。そうしないと後がない。今やっとかんとね」

羽賀台共同生産組合組合長、藤田芳昭さん。畑の作物を一つ一つ確認する

クリの観光農園からブドウの産地に、平原台

羽賀台をあとにし、平原台へ。農事組合法人平原台農業生産組合（平原台農園）組合長の阿座上（あざかみ）和徳さん（昭和26年生）が待っていてくれた。夏場は、ブドウを買い求める人で賑わう農園事務所も、シーズンオフの冬場はがらんとしていた。

「昭和38年の豪雪を契機に、農園がはじまりました。クリを植えて、所得を上げようと。もともと国がここを買いあげて、軍工場を造ろうとしていたのを戦後の払い下げで農業地帯にした場所です」

昭和42年に農業法人平原台生産組合が設立。農業収益を上げるために、みんなで合資会社をつくり、クリ拾いなど観光農園をはじめた。クリに着目したのは栽培が簡単で、元手がいらないことから。

昭和46年、ブドウを試験的に育ててみると、うまくいった。ブドウは所得につながり、クリは衰退していく。だが、ブドウ栽培を展開させるには、水が必要だった。ちょうど総合基盤のパイロット事業が入り、ポンプで水を引くことができた（昭和57～58年、農村基盤総合整備パイロット事業）。さらに、ハウス栽培にすることで経営が安定。旧福栄村の補助を活用し、可能になったという。

今、売り上げの半分は直売である。北海道から沖縄まで2,000人の顧客を持つ。昔からのパンフレット販売や口コミで広まった。現在は、値崩れしないお盆までに、ほとんど売ってしまうのだとか。

今は、代替わりもしたが、初代組で現役の人もいる。90歳だ。これまでハウスが雪で潰れたこともあり、それをきっかけにやめた人もいるという。一方で、Iターン者も来た。現在は、個人で観光農園を設け、ワインもつくっている。

「今、組合は4軒だけ。かつては10軒です。わたしは今68歳で、一番若い。高齢化の時代、維持していくのがたいへんです。しかも、後継者不足。

でも、守っていかないけんじゃろ」

阿座上さんは、語気を強めた。

平原台農業生産組合、2代目組合長、阿座上和徳さん。昭和42年から阿座上さんのお父さんが初代組合長をつめた

定年退職した息子さんと一緒に柿栽培をしている初代の人もいるという

ブドウはハウスのなかで栽培し、柿は露地

県内トップの黒毛和牛の産地、長沢台

人気の黒毛和牛「長萩和牛（ちょうしゅう）」が育つ、長沢台。ここの牛肉は、東京、大阪方面への出荷をはじめ、２０１６年山口県長門市で開かれた日露首脳会談のディナーにも出された。現在、繁殖牛１００頭、育成牛８頭、子牛60頭、肥育牛１８０頭が９棟の牛舎と牧場で暮らす。萩市最大の規模を誇る。繁殖牛と肥育牛を一環してやっている牧場としては、県内トップ。

農事組合法人長沢台生産組合代表理事の水津（すいつ）元廣さん（昭和26年生）は、「繁殖は毎月10頭生ませるのが理想。出産は目が離せない。今はこんなものも使うよ」といいながら、おもむろにタブレットPCを取り出した。そして、設置カメラの映像を次々と確かめていく。牛舎にカメラを設置しているのだ。出産間近な雌牛には、破水するとセンサーで知らせる装置も導入。万全の体制を取っている。

長沢台は、昭和52年に農村基盤総合整備パイロット事業の一環で開発がスタートした。昭和57年に畜産団地として始動。昭和59年に農事組合法人に。

現在、13ヘクタールの牧草に、3ヘクタールの水田も抱える4戸9人の法人だ。高級肉を育てる現場というだけでなく、地元農家と、エサとなる稲わらと牛糞による堆肥を交換し、循環型農業を推進していることも、ここの特徴である。

「牧草のほかに、年間約50～60ヘクタール分の稲わらを買っています。自分たちで出かけていって、ロールにしますよ」

稲わらのロールは、直径１２０センチメートル、重さ２００キログラム。それが1シーズンに約1、０００個。

「堆肥は、稲わらを出してくれた農家に７００トンほど届けています。そのほか、萩市の小中学校や保育園にも無償で提供してます。牛糞の堆肥があることで地力がつくんです。地元農家と連携してやっていますが、農家が減っていくなか、こうした循環型農業も継続が問題になってきているんです」

羽賀台。ドローン写真撮影:伊達千恵

長沢台の標高は370m。冬場、水道を凍らせないようにしなければならないという。「とにかく牛に水を飲まさなきゃいかんから」

長沢台生産組合代表理事の水津元廣さんは、山口県家畜人工授精師会会長でもある。手にしているのは、分娩予定の雌牛につける器具

水津さんは鳴き声で牛たちの区別がつくという。肥育牛は「長萩和牛」。商標登録をして、8年目。令和元年、岡山・山口合同牛枝肉研究会で最優秀賞に輝くなど、輝かしい成績を持つ

食がブルースカイヒルをつなぐ

福栄4台を耕してきた農家は、整備事業後の土を1年1年、石ころを取り除き、籾殻を敷き込むなど、耕作土を育ててきた。そして、長沢台から出る牛糞の活用で、より地力をつけてきた。かたや、牛たちは、地元の牧草や稲わらで育ち、名を上げてきた。

「まもなく平蕨台へ向かう道路が広がり、大型バスが入るようになります。将来は、平蕨台にある交流施設『夢るーらる雲海』を拠点に、都市から人が来るようにしたいね」

先の白神理事長がそう話す。「夢るーらる雲海」は、今も、わらび採りなどイベントの拠点である。

「平蕨台のオリーブをここで絞る体験もできたり、オリーブを生かしたレストランもできれば、いいですよ。オリーブを絞った粕は、長沢台の牛のエサにもなる。そして、その美味い肉をここで食べられる！　そうなると最高じゃないですか」

美味しい野菜や米は、羽賀台から。デザートには平原台のブドウ、柿を生かす。そして、地元のエサで育った、長沢台の牛肉。まなざしを上げれば、平蕨台の眺望が広がって……。

「そうなると、面白い！」

4台をつなぐ道路も現在工事中で、まもなく開通するという。食を通して、点在していた農地がつながり、互いを補完し合い、一つの農の世界に人々を誘う。まさに、福栄4台の農のネットワークが生み出す、食と農のテーマパークの誕生だ。「ブルースカイヒルネットワーク」。

今、その響きが腑に落ちた。

写真左、福栄土地改良区理事長、白神崇さんは、平蕨台を展望できる交流施設「夢るーらる雲海」のウッドデッキで、藤原さんと夢を語り合った

平蕨台。ドローン写真撮影:伊達千恵

◉巻頭特集

やまぐちの「農の偉業」探訪⑤

山陽小野田市　寝太郎堰

長寿化時代を人々とともに生き抜く「寝太郎堰」

取材・文：石井里津子

寝太郎堰。疎水百選（2006年農林水産省）に認定されている。堰長82.5m。もともとは千町ヶ原386.6haを潤していたが、現在、受益地は113ha

「『寝太郎堰』というのは、愛称なんですか？　それとも正式名称ですか？」

「正式名称ですよ。その昔は、『大井手堰』という名でしたが、昭和38年の県営工事で今の頭首工にして、『寝太郎堰』という名前になりました」

山陽小野田市、厚狭寝太郎堰土地改良区の笹尾新太郎理事長と縄田康彦事務局長が愚問にもかかわらず、笑顔で答えてくれた。

国内にある農業水利施設の名称は、地名由来が多いかと思うが、何しろ「寝太郎」とは、民話の主人公の名前なのだ。

この地に残る民話「厚狭の寝太郎」。厚狭川に堰を造り、荒れ地を開墾した「寝太郎」の物語で、堰の名はそこからきている。地元のこの民話への親和ぶりは、主人公が、山陽小野田市のマスコットキャラクターになっていることや、毎年4月29日に「寝太郎まつり」が開催されていることからもわかる。

さらには、物語をモチーフにした「厚狭川河畔寝太郎公園」が、厚狭川沿いに造成され、市民に親しまれている。

厚狭川河畔寝太郎公園は、厚狭川に沿って点在する、複数の公園で構成。民話がモチーフで「ゆめ広場（野外ステージ等）」をはじめ、「わらじの公園」「桶の公園」「砂金の公園」、「千石船の公園（現在、千石船の遊具は撤去）」がある。写真は、「桶の公園」にある公衆トイレ

寝太郎堰の前で、厚狭寝太郎堰土地改良区の笹尾新太郎理事長（右）と縄田康彦事務局長

開田物語の「厚狭の寝太郎」

寝太郎民話は、全国各地に似通った物語がある。それは、3年3か月のあいだ寝続けた若者「寝太郎」が突如、知恵を働かせ、富を得るストーリーだ。だが、民俗学者の柳田国男は1930年に、「水土平定」（＝開田）を称える物語は、唯一「厚狭の寝太郎」だと記している。

民話「厚狭の寝太郎」は、次のようなあらすじ。

いつも寝てばかりだった寝太郎がある日、父親に千石船の建造を頼むところから物語ははじまる。千石船に積み込んだのは、なんと大量のわらじ。そして向かった先は、新潟・佐渡島。

寝太郎は、佐渡の金山で働く人たちの古くなったわらじを、新調わらじと交換して歩く。

その後、古いわらじを村に持ち帰り、大きな桶のなかでそれらを洗うと、桶の底には、わらじについていた砂金が！

それを資金に堰と水路を造り、美田の「千町ヶ原」を拓いた、というお話である。ちなみに「千町ヶ原」は今も残る地名だ。

先の笹尾理事長は言う。

「調べてみると、民話のほかに伝説があります。ここが大内氏の支配下にあったとき、陶晴賢（すえはるかた）の反乱で大内氏が自害し、家臣も追われた。その家臣のなかに、もとは信州・武田家配下の者がいて、落ち延びたその人物がこの堰を造り、一帯を開田したというんです」

大内義隆が自害したのは1551年。山陽町史には、天保3（1842）年の「防長風土注進案」（＊1）の一節が紹介されている。

「中古大内家四箇国の武将たりし時に当って、賤の男に一人の異翁あり……川上沓村といへる所に大いなる堰を工夫し……終には千町が原を開き田園となし……」

16世紀ごろに身分は高くないが、才ある男が大きな堰を造り、千町ヶ原を開田した、と江戸後期には知られていたのである。

江戸中期の資料に出てくる「祢太郎」

その約100年前、寛保2（1742）年から作成され、萩藩の絵図方、有馬喜惣太が残した図絵「御国廻行程記」（＊2）のなかに、「祢太郎塚・千町畔ト云」と記載された場所が出てくる。解説に「厚狭の祢太郎と云者才人にて千町の田面へ水懸りの工夫をいたし一向に千町を取立……」とあり、よってこの地で「祢太郎」を祀っている、と書かれてある。

さらに、寛保2（1742）年の「地下上申」（＊3）には、「往古荒地ニて候所ニ厚狭之祢太郎と申者吟味ニて田地ニ相成……（後略）」とある。昔から荒れ地であったところを厚狭の祢太郎という人物が田んぼに変えた、と申し伝えられている、というのだ。

今から200年前は、「民話」よりも

「言い伝え」であったのだ。それが、いつしか愉快な民話へと転じ、砂金とも結びついていったのだろうか。

笹尾理事長はこうも話していた。

「厚狭川でその昔、砂金が取れていたという説もあるんですよ」

民話のなかに地域の歴史の謎が織り込まれているのかもしれない。何より確かなのは、厚狭川に堰を造り、田を拓いた人物の偉業に、後世の人々が代々、何百年に渡って感謝し続けてきたことだ。

地域に残る、寛延3（1750）年建立の「寝太郎荒神社」は、地区の農民が偉業に感謝して奉納したものだという。また、JR厚狭駅前には、稲束と鍬を手にした巨大な寝太郎之像が立つ。1971年に建立した厚狭駅のシンボルだ。

この地には寝太郎への感謝が脈々と受け継がれている。

寝太郎堰へ向かう

厚狭駅から北へ、約1・5キロメートル。駅からそう遠くない、比較的緩やかな地形を流れる厚狭川の中流に、寝太郎堰はあった。頭首工の橋脚や安全柵が、黄色に塗装されている。黄色に彩色された頭首工は、珍しい。グレーやペールグリーン、また、赤く彩色されたものは全国でもよく目にするのだが、黄色は新鮮だった。

稲穂の黄金色をイメージしたものなのか、はたまた民話に登場する砂金色からなのか。その疑問に、縄田さんが笑いながら答えてくれた。

「いえいえ、工事の際に業者さんがつけた色で、危ないですから注意喚起の意味でしょう」

とはいえ黄色が、工事的なニュアンスよりも、かわいらしい印象を与えるのはつい民話「寝太郎」を思いながら、見てしまうからだろうか。

現在の寝太郎堰は、大洪水の破壊を機に、昭和34（1959）年県営かんがい排水事業を導入。古い水路を整備し、昭和38（1963）年に頭首工が完成したものだ。

「以前の大井手堰は、杭を組んで石を並べた昔からの堰でした。水路も土水路。厚狭川は水量があり、昔から決壊して氾濫しますから、堰はそのたびに修理です」と笹尾理事長が言う。

取水された水は、堰から約1キロメートルほどの分水工で2本に分かれる。一本は、厚狭川とほぼ平行するように千町ヶ原を南下していく東幹線。もう一本は、厚狭川とほぼ直角に西へと延びたのち、南下する西幹線だ。合わせて8キロメートルほどだが、枝線も入れると10数キロメートルになるという。

寝太郎荒神社は千町ヶ原のほぼ中央にあり、JR厚狭駅の新幹線口近く。建立当時（1750）年は広大な田んぼの中に建てられたのであろうが、今では住宅と隣接し、新幹線の高架が近くにそびえている。広瀬地区の農民たちが石祠を建てて、祀るようになった

千町ヶ原の北端にある円応寺にも、寝太郎が祀られてある。昭和3（1928）年に見つかったという「稲荷木像」が寝太郎御神体と考えられている。4月29日の寝太郎まつりでは、千石船を模した山車に、この御神体が住職とともに乗り込み、町を練り歩く

厚狭駅を降り、改札を出ると、目に飛び込んでくる巨大な寝太郎之像。寝太郎堰を造ったとされる寝太郎翁の姿だ。寝太郎権現奉賛会によって1971年に建立

昭和43（1968）年にできた寝太郎用水分水工。石板には分水協定が彫られている。幅の太いほうが、東幹線へと流れていく。現在は西幹線のほうが耕作面積は広いが、全体に耕作地が減ってしまったため、この分水幅のままで足りているのだそうだ

東幹線のエリアは、住宅化が顕著だ。30年ほど前に住宅団地もでき、とくに数年前から住宅が増えた印象があるという。厚狭駅は、新幹線の停車駅で、広島や福岡までもが通勤圏に入る場所ゆえだ。

一方、農業振興地域である西側は、今も稲作が盛んな田園エリアだが、2020年はトビイロウンカの被害が目につき、胸が痛くなった。

2020年、山口県全域の水田がトビイロウンカによって、大打撃を受けた。笹尾理事長も「まるで額縁のように、内側がウンカにすべてやられてしまっている」と嘆いていた

市街地を守る寝太郎堰と寝太郎用水

寝太郎堰と市街地を流れる寝太郎用水は、街を浸水から守り、防火用水としての機能も果たす。ゆえに、土地改良区は、常に雨や災害に備えている。たとえば、台風の前には、頭首工の水門を閉めておくなど、大量の水が市街地に入り込むことを防いでいる。

こうした機能を保つためにも、用水路の泥上げや草刈りなど清掃活動は欠かせない。自治会や水利組合で年に1～2回取り組む。だが、高齢化が進み、参加者の数が減ってきているという。

笹尾理事長が顔をしかめながら話す。

「水路などの環境保全への理解をみんなに求めるのは、むずかしい。農業をやる者だけが、行うものだと思われているけれど、暮らしを守るために、維持管理は絶対に必要なんです。

たとえば、消防団に入っていれば、防火用水としての機能を知り、水路に関心を持ってもらえる。けれど、平気でビニール袋を捨てたり、弁当の空箱やペットボトルなどを捨てたりする人もいるんです。ゲートにごみが詰まってしまうと、水が溢れ出すんですよ」

長寿化時代に向けて

笹尾理事長は続けた。

「水害を防ぐためにも農業水利施設をどう守っていくかが課題です。田にも水をためる力があり、住宅街を守っています。このインフラをきちんと守ることで、わたしたちの町も安全なんです」

縄田事務局長もこう話す。

「寝太郎堰もコンクリートにひびが入るなど老朽化してきています。わたしたち土地改良区は、それらをていねいにメンテナンスし、長持ちさせないといけない。頭首工と用水路は、どんな時代になっても守らなければならないものです。水資源は大事ですから」

寝太郎用水路は、千町ヶ原を網の目のように凋しながら瀬戸内海へ向かう。すべて開水路。水路にはイトトンボが飛び交うなど、生きものたちの生息の場となっている

下流域は、砂地で、伏流水が取れる場所が多数あるという。住宅街の民家でも井戸水を取ることができるほどだとか。千町ヶ原一帯に用水路が細かく張り巡らされているおかげで、地域の隅々にまで水が行き渡るという、地下水ネットワークが形成されているからだ。

笹尾理事長は、土地改良区の総会などでよくこう話すという。

「寝太郎堰は歴史的遺物です。町全体の生命線になっているんです。それをみなさんとともに残していきましょう」と。

◎

「120歳まで生きちゃる！」

85歳の笹尾理事長が茶目っ気たっぷりに言う。後継者不足のなか、自らが元気に動いて、守っていこうという心意気だ。76歳の縄田事務局長もしかり。

「90歳までは働きたいですね。今は良い機械があるから、高齢者でも農業はできる。農業は楽しいですよ。今年はウンカに悩まされていますが、よし来年は！という気持ちになれるのが農業です」

「人生100年時代」を迎え、農業を守り、地域を守り、水利施設を守る「守り人」たちも「持続化・長寿化」に向け、気持ちを切り替えていた。勢いで駆け上がる農業ではなく、先へゆっくりとていねいに延ばしていくやり方。そして、後継者不足を嘆くよりも、まだまだ自らが動くことを目指す生き方がここにある。

寝太郎堰も、人々とともに明日へとつながってゆく。そして、昔からの知恵や思い、感謝も一緒に明日へと延びてゆく。

【脚注】

＊1「防長風土注進案」：天保12（1841）年に萩藩が、防長全域の各村に命じ、まとめさせた地理や産業、習俗などの調査報告書

＊2「御国廻行程記」：寛保2年（1742）から作成された、萩から江戸までの参勤交代路を描いた街道絵図。萩藩絵図方の有馬喜惣太らが描いたとされる、殿様のためのガイドブックのようなもの。この詳細さと表現力は高く評価されている

＊3「地下上申」：享保12（1727）～宝暦3（1753）年にかけて、萩藩の命で藩内全域の情報が集められ、上申された地誌

■参考文献

『防長地下上申三』山口県地方史学会編・刊行　1979

『山陽町史』山陽町史編集委員会編　1984

『山陽小野田市郷土史研究叢書　写真集　寝太郎堰』河野豊彦　2015　私家版

「郷土文化　ながと　29」長門郷土文化研究会　2017

『定本　柳田國男集　第八巻』1967年　筑摩書房

『物語の中世』保立道久　1998年　東京大学出版会

「寝太郎伝説の深層構造」井上孝夫　千葉大学社会文化科学研究第12号　2006

山陽小野田市HP

春には、満開の桜が寝太郎用水路を包みこむ

寝太郎堰の頭首工は黄色に彩色されていて、愛らしい

◉巻頭特集

やまぐちの「農の偉業」探訪⑥

山口市　阿知須ため池群

ため池ネットワークがつなぐもの 水、地域、そして過去も未来も

取材・文：石井里津子

万年池は、昭和42（1967）年に開設したゴルフ場の一部となった

「山口市・阿知須のため池群」が持つ水ネットワークの全貌を知る人はそう多くはないだろう。垣間見たなら、壮大なスケール感に驚くにちがいない。

山口市内にため池が多いという認識はあまりなかったが、旧阿知須町の山手側では、木々の向こうに、はたまたゴルフ場のなかに豊水の美を湛えながら、いくつものため池が存在していた。山口市阿知須土地改良区が管轄するため池リストには、67個のため池の名が連なる。満水面積約26ヘクタールと最も大きいのが「万年池」。最小のもので1・5アールほど。

「個人所有のため池を入れますと70以上はあります」

山口市阿知須土地改良区理事長、中尾晴海さんが言う。そして、この土地改良区のなかに15の水利組合が存在する。池の管理はそれぞれの水利組合が受け持つが、昭和末期からの県営ほ場整備に伴い、用水をパイプライン化したことで、最終的な水利権は阿知須土地改良区にあるという。

航空写真を見ると、ため池群のなかでも圧倒的な存在感を放つ3つの池がある。北から「江畑池」「万年池」「黒谷池」。特筆すべきは、それらが水を補完するネットワークを築き上げていることだ。そのための隧道までわざわざ掘ってあるという。今回は、その知られざる水ネットワークを明かしていこう。

山口市・阿知須のため池群と受益地
（山口県土地改良事業団体連合会作成）

山口市阿知須土地改良区の理事長、中尾晴海さん。中尾理事長の「ほい、ほい。ええですか?」といった軽妙な掛け声のおかげで、山中の道もくじけることなく突き進めた

主要な3つの池、江畑池、万年池、黒谷池

山口湾に面し、阿知須干拓地「きらら浜」のある旧阿知須町エリアが、今回の話の舞台。現在の海岸線から、この地で最も高い青山（標高130・6メートル）までは約8キロメートル。ここ全域の農地が山口市阿知須土地改良区が管理する受益地約360ヘクタールにあたる。

西から東へ、山口湾へと流れ出る河川は2本。まるで姉妹のようにほぼ平行して走っている。北側が土路石川、南側が井関川。いずれも2級河川だ。上流にあるため池の水は、これら河川と万年池からの水路に流れ込む。

「万年池が一番の親分です」

中尾理事長がわかりやすく教えてくれた。万年池は、江戸中期の築造で3つの池のなかで最も古い。親分だけに中央に鎮座し、まるで大ナマズが2本の太い髭を伸ばすかのように、両河川とつながり、地域全体に水を行き渡らせている。

そして、万年池の北側にある江畑池は、昭和初期の築造で一番の若手だ。土路石川に流れ込むほか、万年池との間にある小さな焼野池を中継し、万年池と連なる万年下池からの水路ともつながることで、万年池の水不足を補完する。

一方、万年池の南側には、明治時代後半に築造された黒谷池がある。こちらも万年池との間にある明石川池と明石川下池からの水路とつながり、万年池が黒谷池の水不足を補えるようになっている。

「ええですか？　はい、行きますよ！」

中尾理事長の軽妙な掛け声に乗り、案内を受けながら現地を訪ねた。

まるで古城のような江畑溜池堰堤

「江畑溜池堰堤は、下から見ますか？上から見ますか？」という中尾理事長の問いに、「ぜひ、下から」とお願いした。堰堤の下へと向かう管理道は、水路沿いに設けられ、生い茂る木々の奥へと続いている。その管理道を通って、堰堤の袂に向かう。進んでゆくと、木々の向こうに石張りの堰堤が立ち塞がっていた。そそり立つ壁面が、怖いほどに迫ってくる。圧巻の存在感。

江畑溜池堰堤。玉石コンクリート造重力式灌漑用ダム堰堤。この方式としては国内最古の一つ。管理は万年溜池水利組合

江畑溜池堰堤は、昭和6（1931）年に築造されたもの。コンクリート造重力式としては国内最初期のものが、ここ山口市に現存し現役である。現在も農地約92ヘクタールを潤す。その歴史・文化的価値は高く、平成13（2001）年には国の登録有形文化財となった。

堰堤の表面には花崗岩が張られている。築造から90年以上経つため、堰堤全体がいぶし銀のような風合いを見せ、ヨーロッパの古城の城壁かと見紛うほどだ。堰堤の高さは14・4メートル。その脇についている管理用の急な階段を登り、堰堤の上へ上がった。

木立が、豊潤な水を抱くように湖面の周りを囲む。深い群青色の水は、静けさも相まって幻想的な雰囲気を醸し出していた。貯水量45万立方メートル。堰堤の長さは約69メートル。その真ん中に半円形の取水塔が設けられ、古城のような趣をさらに引き立てている。

江畑池の築造は江戸時代からの悲願だった。明治22（1889）年に一度完成したものの、翌年に大決壊。甚大な被害を村落に及ぼしてしまう。そして、昭和3（1928）年、土質のもろさを克服するため、コンクリート造重力式ダムが県営事業で導入され、ようやく昭和6（1931）年にでき上がる。

完成の背後に、人生を賭けた一人の人物がいる。旧井関村の村長を経て、衆議院議員も務めた徳田譲甫（1855―1931）だ。徳田は、執念ともいえる情熱で、2代に渡り、悲願のプロジェクトを完遂させた。自ら旗を振った江畑池が決壊し、その再建に力を尽くしたのだ。彼の国や県への働きかけがあったことで、全国でも早い時期にこの地にコンクリート造重力式ダムが導入されたといえるだろう。

古城のような堰堤は、明治・大正・昭和を生き抜いた戦前のリーダーや技術者たちの強い信念と高き志の結晶だった。

徳田譲甫翁像。徳田の執念ともいえる偉業への感謝は、彼の銅像建立にも見受けられる。大正15（1926）年に建てられた初代の銅像は、太平洋戦争時に軍事供出されたが、昭和39（1964）年、時の町長らにより陶器の像で色鮮やかに再建された

万年池のほとりには、万年池の石碑が建つ。碑文には、昭和24（1949）年9月に、黒谷池の水不足を補うため、万年溜池水利組合と黒谷溜池水利組合によって結ばれた協定が刻まれている

ゴルフ場内の万年池は庭園の如く

江畑池の水は、土路石川へと縦に流れるだけでなく、高低差の少ないなか、横へと水を流し、万年池の水を補完する。山陽本線をくぐるため、隧道を設けたり、道路や川などを乗り越えるため、サイフォンを利用したり、随所に工夫が施されているという。

万年池は阿知須ため池群のなかで最大の規模を持つ。周囲7キロメートル、総貯水量101・3万立方メートル。受益地131ヘクタールを潤す。築造時期は元禄年間（1688～1704）という。当時の白松庄屋、林又左衛門によって築かれ、その後、増築拡張が繰り返され、現在に至っている。

ここも決壊の苦い歴史を持つ。嘉永6（1853）年、大規模拡張をした年に堤が大破。だが、安政6（1859）年からの修復工事で、10倍の水面面積となる。その後も明治8（1875）年に拡張工事が行われ、さらに昭和39（1964）年にも改修され、現在の姿となった。

かつての万年池は、地域の憩いの場だったというが、昭和42（1967）年にゴルフ場のなかに組み込まれ、半世紀以上の時が経つ。ゴルフ場内とはいえ、池は、万年溜池水利組合が所有し管理している。

明石川（みよしがわ）石碑。万年池と、明石川下池からの水が合流する地点あたり。明石川（井関川の上流）へ向かう水と、黒谷池へに流れる水の分岐の場所に建つ。碑文には、大正7（1918）年12月に締結された条文が刻まれる。毎年8月彼岸から翌年の入梅前日まで、明石川池から黒谷池に補水を約束する内容だ

黒谷池は土堰堤。そのため、堰堤幅が広い

万年池を見るために、ゴルフ場に入らせてもらった。整備されたグリーンを横目に進み、整えられた松の木の向こうに、満々と水を湛える万年池が見える。一気に空が広がったかと思うと、空や雲、周囲の木々を映す、広大な鏡のような水面が目に飛び込んできた。場内は、芝生も木々も手入れが行き届き、池は凛とした姿で横たわっている。日本庭園を思わせる風格だった。

池の畔には、土地改良区が管理する石碑が鎮座していた。昭和24（1949）年に定められた万年溜池水利組合と黒谷溜池水利組合の協定を記した万年池碑文だ。万年池から黒谷池へ水を補う約束が刻まれている。最後、黒谷池とそこへ水を送る隧道に向かった。

黒谷池へ、手掘りの隧道の謎に迫る

黒谷池は昭和46～47（1971～72）年に改修されており、現在貯水量37万立方メートル。築造の契機は、日露戦争終戦後の戦勝記念だという。明治40（1907）年に県営の耕地整理事業で、田地約60ヘクタールの造成とともに建造された。

万年池からの水を黒谷池へ送るための隧道。その入り口。戦後すぐに山口県立山口農業高等学校の生徒たちが掘ったものであることが今回確認できた

だが、水不足が続き、大正時代に明石川（井関川の上流）の余水を取る水路を掘削。それでも改善されず、太平洋戦争後、万年池からの余水を黒谷池へ流し入れる水路が増設された。今回、ここに設けられた隧道に着目したい。現場に出向く前、中尾理事長はこう話していた。

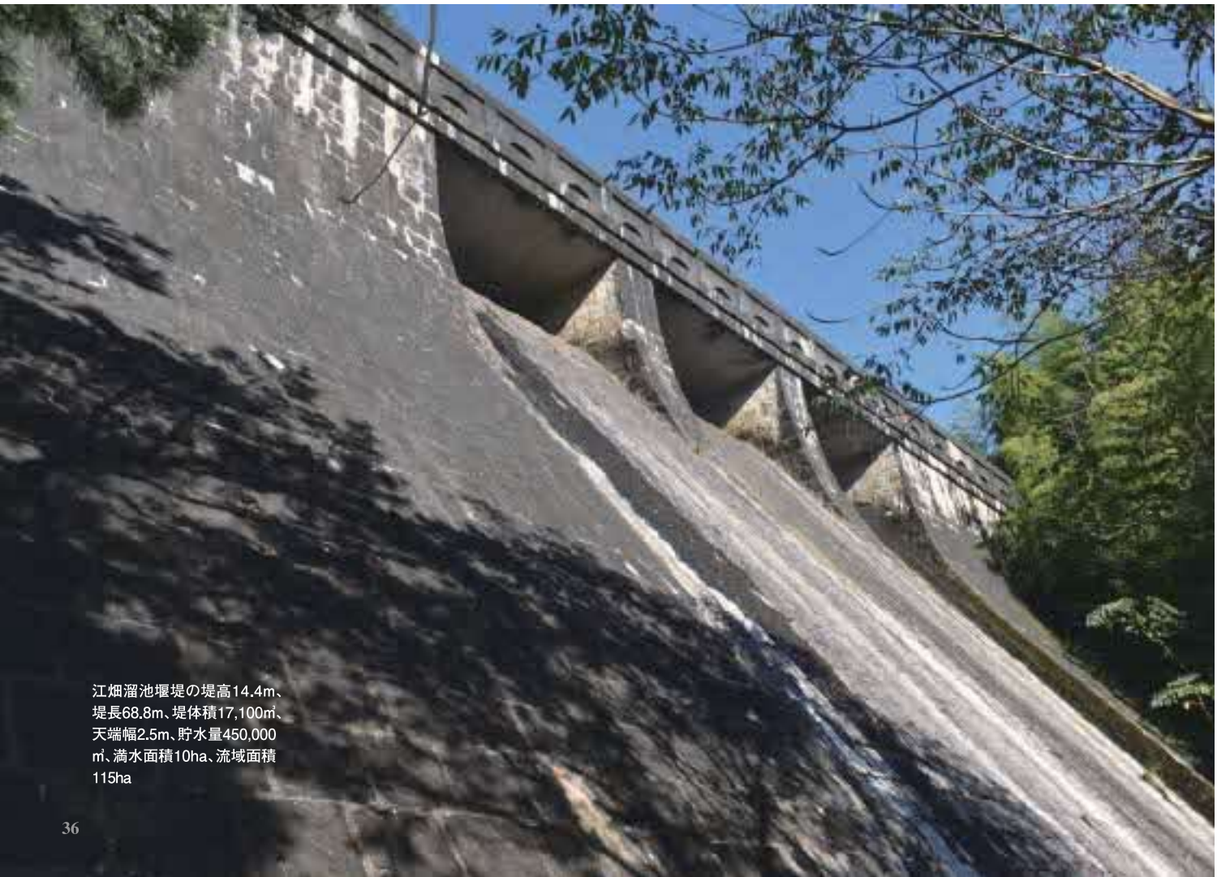
「ここの隧道は、農高（山口県立山口農業高等学校）の生徒が掘ったようなんです。どうも戦後の食糧増産の時期に高校生が実習も兼ねて、奉仕活動で掘ったんじゃないかと思うんです。

ちょうど知り合いのお父さんが掘ったなかの一人らしくて。その人はもう亡くなりましたが、その弟さんから『兄貴が高校生の時、隧道を掘った』という話を聞きましてね。息子さんのほうに今、確認しようとしちょるんですが、電話がつながらんので、ちょっと待っといてください。お父さんが何年生まれかわかったら、隧道を掘った時期もわかるでしょうから」

話は続いた。

「隧道そばの、引野地区の明栄寺のおばあちゃんから聞いた話もあるんです。85歳ぐらいの方で、お嫁に来て、住職から戦後、本堂に高校生が大勢寝泊まりして、作業に出ていたと聞いたそうです」

戦後いつ、誰の手によって掘られたのか。資料による記述は見つけられなかった。ただ、昭和24年（1949）年9月15日、万年溜池水利組合と黒谷溜池水利組合との間に補水の契約が成立し、毎年10月1日から翌年4月末日まで給水を行うようになっている。つまり、昭和24年9月には通水可能だったことがわかる。



江畑溜池堰堤の堤高14.4m、堤長68.8m、堤体積17,100㎥、天端幅2.5m、貯水量450,000㎥、満水面積10ha、流域面積115ha

特別に管理道のなかへ入れてもらった。車から降り、山道を木々の枝をかき分け進み、数分後、「ここが隧道の入り口です」との声に足を止める。

コンクリートのU字溝の先に目をやると、岩山の下腹にぽっかりと穴が開けられていた。人が一人しゃがめば入れるだろうか。いや、這うように入らねばなるまい。狭さが、人力で掘った感を強める。なかは黒々としていて、何も見えない。

「出口に行きましょうか」

再び車に乗り黒谷池に到着し、そこから隧道の出口へ向かった。鬱蒼とした木々のなかへ再び入ってゆく。

「ここです」と中尾理事長が指さす先には、斜面の下、深い溝が掘られており、隧道の穴の手前部分もごっそりと岩山がえぐられていた。その先に人一人が身をかがんで入れる程度の穴が開いている。岩肌には、明らかに手掘りの痕跡。穴の形も手作りの隧道らしく、いびつだ。隧道の長さは、計ったことはないとのことだったが、地図上で考えても100～200メートルはありそうだった。

黒谷池側より向かった隧道の出口。岩盤を手掘りで削ったあとがはっきりわかる。作業しやすくするためか、出口周りの空間も掘ってあった

「勾配差が15センチメートルぐらいでわずかの差です。どうやって造ったのかわからんですよ。作業は大変だったと思います」

隧道は戦後すぐ、高校生たちの手で

日も陰りはじめ、現場を巡り終えたとき、中尾理事長の携帯電話が鳴った。

「ほうですか。やっぱりお父さんが掘った。で、お父さんは何年生まれか、わかりますか」

先に話していた息子さんからかかってきたようだ。電話を切った中尾理事長が興奮気味に振り返った。

「農高の生徒さんたちが掘ったのは間違いないですね。お父さんが、農高の生徒の時に、ここの隧道を掘ったと話されていたそうです。昭和4(1929)年9月生まれだそうで、その人が高校生ゆうたら、ちょうど戦後すぐでしょう」

高校生といえば、16～18歳だ。戦中戦後の混乱期、進学進級がスムーズだった保証はないが、昭和4年生まれなら、昭和20年4月～23年3月の出来事である。少なくとも水利組合の締結がなされた昭和24(1949)年秋には、隧道は貫通していただろう。中尾理事長は続けた。

「戦後の食糧増産のために、若者が汗を流したんですね。当時の高校生の気概を感じます」

追って、山口県立山口農業高等学校の学校史など資料も当たってもらったが、記録は見つからなかった。

10代の若者たちが残した手掘りの隧道。ともすれば忘れられてしまいがちな地域の思いや歩みを生々しく刻みつけている。敗戦下の日本で、皆が食えるように、地域を豊かにしようと、高校生たちが意気込んだ証である。

阿知須ため池群の水ネットワークは、何年も何代もかけて知恵と労力を重ね、ため池をつなぎ、時をつなぎ、人をつなぎ、「今」を創っていた。人口減の今だからこそ、山口市阿知須土地改良区のように地域の物語に耳を傾け、未来へと確かにつなぐ時が来ているように思えた。

土路石川と井関川の流域は、沖積平野が広がり、なだらかな地形が続く。10月上旬、稲穂が黄金色に輝いていた

■参考文献

『あじすの記憶』阿知須町企画編集・発行　2005

『田園維新』山口県土地改良事業団体連合会発行　2000

『阿知須町史』阿知須町史編さん委員会　1981

『あじす史話』中野真琴著　阿知須町役場発行　1969

『阿知須町史』藤村忠明著　1976

ゴルフ場内にある万年池は手入れがなされており、庭園のような趣き

◉巻頭特集

やまぐちの「農の偉業」探訪⑦

萩市　見島

国境離島・見島の田んぼとため池と見島牛と

取材・文：石井里津子

八町八反の西側から本土方面を眺めた風景。海には、高速船「ゆりや」が見え、その手前にジーコンボ古墳群が広がる

山口県萩市見島（みしま）――日本海に面した萩港から北へ約45㎞。高速船に乗って70分ほどの、周囲約18㎞、面積8㎢もない国境離島である。人口は、2022年9月末で677人。そのうち、島の西部にある自衛隊基地の関係者が200人弱を占めると聞く。

昭和30年代には約3千人が暮らしていた。かつては水田が百町歩以上あり、米が百俵も収穫できていたというから驚きである。なぜなら、見島には高い山もなく、川もない。ため池群と天水のみで耕作し続けてきた田んぼなのだ。

3年ぶりに見島へ向かった。2020年にコロナウイルスによるパンデミックが起こり、病院のない見島に渡るのは難しくなっていた。

「ゆりや」に乗船する。9月～2月は一日2便のみ。北へと広がる日本海は、進むほどに波が高くなり、船は、繰り返し高波にどんと当たっては、ぐぐっと持ち上げられ、どーんと落ちた。

この日は、接岸するまで揺れ続けた。ふらつく足でタラップを降りる。こぢんまりとした港に人々が集まり、積み荷を受け取ってゆく光景。以前と変わらない。船酔いを鎮めるため、しばし港の待合所の長椅子に腰掛けた。

「時化（しけ）とったやろ。今日は、漁師も海に出とらんよ。船が新しくなったゆうても、海は変わらん。海は昔も今も同じや」

帽子をかぶり、マスクをした島のおばちゃんが話しかけてきた。見知らぬ人だったが、70歳代ぐらいだろうか。新聞か荷物を港まで取りに来たのだろう。見島で海のようすを話すのは、挨拶がわりだ。何しろ、海の荒れ具合に生命がかかっている。海が荒れると、漁には出られず、食料の運搬もなく、島は孤立する。見島ではそれが幾日も続くこともあるのだから。

田んぼの隅を利用して、かつては夫婦2人一組となり、「水かえたご（水汲み桶）」で水を汲み出していた。八町八反は砂地で内側は石組み。石垣の丸石は、浜で拾ってきたり、地中から出たものを活用したりしている。ススキに覆われてきた

千年の田んぼ「八町八反（はっちょうはったん）」

日本海の荒波の向こうに田んぼの多い、小さな島があると聞いて訪れたのは2003年のことだ。20年も前になる。

はじめて見島の最も広い水田「八町八反」（字名。8・8haの意味だが、実際には12haほどある）を案内してもらったときの驚きは忘れられない。一見何の変哲もない田園風景にもかかわらず、田んぼの隅に三角形をした小さなため池が掘られてあり、一歩なかに入ると、それは次々と現れた。しかも、島独自の水汲み桶を使い、夫婦2人一組で水を汲みあげ、田にかけていたという。いまだにこんなため池群に出会ったことはない。

その後、2016年春に見島を再訪し、なぜこのような独特の景観となったのか、謎を追いかけていった。結果、千年以上前に律令国家が日本中に敷いた土地区画制度「条里制」の地割がそのままの姿で残されており、河川による水源がないなか、「ザル田」といわれる砂地の土地で、小さなため池の水を繰り返し利用する、独自の水利スタイルを築き上げていたことが見えてきた。

では、いったい誰が？　どんな賢人がいたのか。ちょうど八町八反の目の前に国指定史跡の「ジーコンボ古墳群」が200基ほど横たわっている。謎の多い古墳群だったが、研究者たちから話を聞いていくと、7世紀後半～9世紀末の、律令官人一族の子どもを含めた家族墓であり、追葬もなされ、何百人という人が眠っていることがわかってきた。

つまり、一族の食い扶持を賄う農地が必要だったはずなのだ。海の真っ只中にある見島で、食糧の自給自足は切実な願いだったのではないか。史料はなく、考古学的な確実な資料もまだないが、状況証拠からすれば、ジーコンボ古墳群の豪族たちが開田に関与した可能性は高い。

条里の地割は、国内で10世紀に入っても作られたが、その後は姿を消した土地区画だ。よって条里の地割を持つ八町八反は、千年前には開田されていたといえる。千年という時間の価値――お金で買えない価値を持つ宝が見島にはある。

八町八反のため池群のゆくえ

2022年10月末、八町八反の耕作断念ぶりは加速しているように見えた。かつて話を聞かせてくれた耕作者が亡くなったり、病気で離農していたり、高齢で島を離れたり……。コロナもあって、外部の手を頼ることが難しく、転がり落ちるようだった。

国指定史跡のジーコンボ古墳群。7世紀後半から9世紀末にかけてのもの。朝鮮半島で起きた白村江（はくすきのえ）の戦いのころ、国を守るため、国境離島である見島に移り住んだであろう律令官人の家族墓

おびただしい数の小さなため池は、生い茂るススキなどに覆われ、確認しづらく、近年改修されたであろう、比較的大きめのものばかりが目に付いた。

何人かの耕作者はここ2年ほどのあいだに耕作をやめていた。国の「農地・水・環境保全向上対策」（現在の「多面的機能支払制度」）と「中山間地域等直接支払制度」の継続を止めたことが大きいという。5年ごとに更新する事業だが、5年後の未来予想図を思い描くことができなかったのだ。八町八反の耕作者で、見島公民館長の天賀保義（てんがやすよし）さんが言う。

「年配の人はもう5年やれるかどうか、そういう人が増えました。自分がやれんようになったら残った人に迷惑をかけるから、と言って……」

島の中心の本村（ほんむら）集落全体で、集落協定を結んだ当初は50人いた農家も25人となった。

萩市立見島小中学校も存続の危機にあった。2023年4月からは、小学生3人、中学3年生が3人。一年もすれば中学生がいなくなるのだ。見島には高校はなく、本土に下宿しての高校生活となる。

耕作放棄地が目立ちはじめた八町八反。田んぼの隅の小さなため池が見えづらい

見島のため池群と宇津（うつ）の棚田

見島には棚田も多い。ここは18世紀にすでに耕作面積が百町歩を超えていたが、棚田など山手の開発が進んだことが大きい。ちなみに棚田のことを見島では「段飾りの田んぼ」と呼ぶ。最近はそんな言葉すら消えてしまいそうだ。

見島公民館長の天賀保義さん。八町八反の耕作者。見島取材の強い味方だ

島内の代表的な棚田といえば、「宇津の棚田」である。「やまぐちの棚田20選」にも選ばれた、見事な棚田が広がっている。宇津集落は、本村よりも新しく、江戸時代初期の開拓だという。

港近くから斜面を迫り上がってゆくように開田された宇津の棚田。宇津地区の田んぼは粘土質で、米は美味しいという。ただ、宇津は地下水に恵まれず、掘っても海水が出るのだそうだ。一方で、湧き水があり、それを利用してきた。

宇津の棚田の耕作者は10人程度。半農半漁というのが宇津集落の昔ながらのスタイルで、ちょうど海が時化て漁に出られないこの日、草刈りや畑仕事に精を出す姿を見ることができた。

さらに、山のなかへ入っていくと、大きめのため池は姿を見せるが、小さなため池はもう藪のなかのようだった。

見島ダム。2002年に完成した、主に上水道・治水を目的としたダム。総貯水量12.5万㎥。堤高31m、堤頂長300m。レアなダムカードは人気がある

粘土質のところのため池は、素掘りだという。そうでないところは崩れる心配があり、石を組むなど手が込んでいる。八町八反のような砂地の土に掘られたため池は、その内側すべてが石垣だ。

天賀さんが山のなかのため池を案内してくれながら話す。

「山の方のため池は、水が漏らない粘土質の土のところに掘ってあるんです。自分ちの山のため池を崩したとき、池の淵から下までそこだけが粘土質でした。昔の人は経験からわかっていたんでしょうかね。どう見極めたんでしょうね」

かつて、見島には250個ものため池があったという。だが、個人所有のものばかりで本当の数は不明なままだ。

「やまぐちの棚田20選」にも選ばれている宇津の棚田。営農は比較的良好に継続されているように見えた。夏、青い海、石州瓦の朱色の屋根、緑の稲のコントラストが素晴らしい（2018年6月撮影）

晩台山の放牧場からの眺め。この牧場は5ha以上の広さがあり、島全体を眺望できる。見えているのは宇津集落

見島牛と多田一馬（ただかずま）さん

そしてもう一つ、語らねばならないものがある。日本で最も古い姿を残す和牛の原型として国の天然記念物に指定されている見島牛だ。農耕牛として重宝されてきたが、昭和30年代後半から機械化が進み、約30頭まで減少。1967年に見島牛保存会が発足し、保存が進められてきた。

遠い昔、どのタイミングで牛が離島に連れてこられたのだろうか。わたしはそれを、田んぼの開拓と重ねて見ている。牛は、耕作の動力である。八町八反に残る条里地割の田んぼは、一辺が約109mという細長い短冊型。これは、牛や馬を使って農作業を一気に行うのに適している。

古代において農地の開発は、牛や農具（鋤）といった新しい農業スタイルとセットだったはずで、この島に同時に入ってきたのではないだろうか。そこから見島牛は、八町八反の開田と切り離せないのではないかと考えている。

見島牛保存会の会長、多田一馬さんの牛舎へ行く。八町八反の東側の晩台山にある放牧場だ。現在ここには約20頭いるという。多田さんは、家の方にも牛舎を持ち、計40頭ほどを飼育する。

「種の保存には100頭の雌牛が必要なんですが、今ようやく80頭ですよ。そこからがなかなか。雌牛は3～15才ぐらいまでのあいだに出産する。良くて20才ぐらいまでかな。保存のために、雌牛は100％残すんですよ」

生まれた子牛の雌は残すが、雄は、種雄牛以外は10ヶ月で出荷。本土で2年間肥育され、希少な肉として出回るという。

見島牛は国指定の天然記念物。日本で最も古い姿を残す和牛。多田一馬さんは見島牛保存会の３代目会長

「見島牛は、現在の和牛と比べて、お尻が小さく、体の前駆部分、肩の前辺りがしっかりしているんです。八町八反のような広いところでも、棚田のような狭いところでも、隅でうまく旋回するんです。小走りもするし、力持ちで小回りも利く。農耕に最適な牛だよ」

雄牛は圧倒的に力強い。雌牛が大きくても体重約350kgに対し、雄牛は600kg近くになるという。

「牛との力比べですよ。こっちも高齢になってきて、腕力がないと牛に押されてしまう。牛も自分のほうが強いと思ったら、押してくるからね」

牛の移動や人工授精時など、力が必要なため、多田さんは、若い力の重要性を感じていた。

希望のIターン 花田（はなだ）康章（やすあき）さん

そんな見島の希望がIターンの花田康章さんだ。2019年3月に地域おこし協力隊として北九州市から訪れた。3年間の任期を終えた現在、見島牛の飼育をはじめ、さまざまなことに挑戦している。

「ここに決めた理由はいろいろありますが、下見に来たときに、保存会の多田会長の志に打たれました。儲からない仕事ですよ。けれど、唯一無二のものだった。牛を飼ったことはなかったですが、見島牛には見島牛の飼い方があって、ほかの知識がない分、そのやり方がすっと入ってきました。見島牛を自分で飼いだしたのは、見島に来て1年経ってからですね。

宇津港。見島には2つの集落があり、一つは見島支所のある本村。もう一つが宇津。宇津のほうが集落としては新しく、半農半漁

花田ファームで。花田康章さんの活動の一つ。野菜作りに自衛隊の家族が参加するなど、コミュニティの場づくりもしている

多田さんから、もう子がつかない廃用牛を譲ってもらったんです。結局、子は産みませんでしたが、弱い牛に寄り添ってくれる面倒見のいい雌牛で……。そこから増やしていきました」

現在、花田さんは、一頭の種雄牛も飼い、自然交配での出産も成功させている。見島での種雄牛は、多田会長のところにもう一頭いるのみだ。

2021年には高齢だった保存会の一人が亡くなり、飼育されていた雌牛を、花田さんは買えるだけ買い取った。島を離れた遺族との交渉は難しく、16頭中5頭のみを残せた。これが金銭的に精一杯だった。とはいえ現在、子牛も産まれ、10頭ほどを飼育している。

「見島の牧草で育てています。八町八反の田んぼを2町5反ほど借りて、年間通して牧草を育てているんです。1日に何百キロと必要です。生餌はほとんどが水分。だから重い。でも、借金してまでのリスクは背負えませんから、自分でできることは自分でしているんです」

子どものころから島や海、釣りが好きだったという花田さん。今も夜は5時間ほど丘から釣り糸をたらす。

「牛の飼育に休日はないですが、夜は自由なんですよ。ここは、やりたいことや興味あることが何でもできる。これまでもハーブを食べさせた『ハーブウニ』の養殖実験をしたり、シイタケを作ったり、『花田ファーム』と名付けて、みんなで野菜作りをしたり。今後は車エビの陸上養殖なども」

花田さんは「ここには、不便以上のメリットがある」と言い、目を細めた。

そんな花田さんが「八町八反(見島)の米から日本酒づくりをやりましょう」と言う。江戸時代に見島で醸造された酒が銘酒として藩に珍重されていたことを裏付ける史料もあり(コラム「見島フォーラム」での樋口尚樹氏の報告参照)、八町八反での酒づくりを実現させようというのだ。新しくて懐かしい見島の酒を味わえる日も近いだろう。

■主な参考文献

『千年の田んぼ　国境の島に、古代の謎を追いかけて』石井里津子著(旬報社)2017

多田一馬さんは、見島島おこし会会長でもある。多田さんの祖父が大凧づくりの名人だったこともあり、継承にも力を入れてきた。今回特別に伝統的な大凧「鬼ようず」を八町八反で揚げてくれた

先の多田さんが、八町八反で鬼ようずを揚げてくれた。鬼ようずとは、見島に残る伝統の大凧だ。毎年正月に長男の誕生を祝って、畳6畳や10畳もある大凧が八町八反で揚げられてきた。多田さんが言う。

「見島牛はなくされん。誰かが守らなきゃ。鬼ようずもなくされん」

鬼ようずが日本海を吹く風を捕らえ、八町八反の上で高く舞い上がった。凧糸を持たせてもらう。もの凄く強い風の力が全身に響く。時代の風もこんなふうにうまく捕まえ、見島が守ってきたものを千年先へつないでいけたら……。多くの人がここを知り、力を出し合えたら……。できるはずだ。ここにはまだまだ伸び代がある。

さあ、ぜひ見島へ。

「見島フォーラム」開催

2022年10月29日、19時から見島ふれあいセンターで「見島フォーラム」が開催された。聴講者は50人ほど。メイン講演は「見島と共に生きる会」(2020年発足)が萩ジオパーク推進協議会の助成を受けて八町八反のため池の築造年代を探った調査の結果報告である。

同協議会の伊藤靖子さんによる「見島の成り立ち」に続いて、萩博物館の川原康寛さんの「八町八反周辺の生物相」の発表。最後に「見島と共に生きる会」の樋口尚樹さん(萩博物館)が「八町八反・溜池の洞木・木杭の年代測定をめぐって」を発表。年代測定を提案した技術者・佐野明子さんも山梨県から参加した。

2022年2月26、27日に、電動ポンプでため池の一つから水を抜き、重機でヘドロを除去し(2021年11月に人力で実施したが、胴木に到達できず)、木杭を確認。そして、胴木と木杭から木片を削り、放射性炭素年代測定の会社へ送付した。

年代測定の結果、江戸時代の1700年代中頃と判明。ため池改修がこの時期に行われたのではないかとのことだった。また、ため池改修の記録は、個人所有のため、萩藩の史料にはなかったという。その一方、江戸時代の「御両国珍名産物」に「見嶋酒」の記載があることなどを紹介。藩内名酒3つのうちの一つというから名高い酒だったようだ。

八町八反のため池内の胴木から木片を採取するようす
写真提供:見島と共に生きる会

◉巻頭特集

やまぐちの「農の偉業」探訪⑧

美祢市 秋吉台周辺

「里山」というカルスト台地のもう一つの顔

草刈場、ドリーネ畑、青い池の「やた」……

すり鉢状の起伏の底に見えるのが「ドリーネ畑」。くぼ地部分が平坦であり、水はけが良いことなどから利用されてきた。近くには山口県秋吉台青少年自然の家が建つ。
ちなみに、ドリーネより規模が大きいものを「ウバーレ」といい、大きなくぼ地のなかの集落「江原ウバーレ集落」が知られている。ドリーネもウバーレも地表に水がないため、稲作は原則なされず、畑作のみだ

取材・文：石井里津子

晴れた秋空の下、白く尖った岩々が、柔らかな起伏を帯びた緑の草原から幾つも顔を出している。山口県が誇る日本最大級のカルスト台地・秋吉台の展望台に立ち、雄大で開放的な眺めに身をゆだねる。この地下に鍾乳洞・秋芳洞の世界が広がっているというのだから、地球の営みは凄まじい。

「秋吉台は、何個の岩でできていると思いますか？」

案内をしてくれたMine秋吉台ジオパーク認定ジオガイドの吉松三男さんから突然のクイズが出た。広さは、約100㎢の場所だ。

――1万？ いや100万個でしょうか？

「いえいえ、1個ですよ！」

吉松さんが茶目っ気たっぷりに言う。

そうだ。ここはサンゴなどの死骸が堆積した、巨大な一つの石灰岩だ。約3億年前に遠く暖かな海でできた堆積物が、海洋プレートの動きに乗って大陸のほうへ移動し、陸にくっついて、ここに現れている。

羊の群れのような白い岩は、長年の雨水で溶け残った地表の出っ張りだ。そして地下の鍾乳洞は、巨大岩の腹のなかが時間をかけて溶け、できあがったもの。石灰岩は二酸化炭素を含む水で溶ける――。今回は、この石灰岩の性質が生み出す、秋吉台の農の希少価値を探しにいこう。

ドリーネの底は丸く、その形のままに畑利用している。すごくかわいらしい農地だ

長者ヶ森。言い伝えでは、世を逃れて移り住んだ豪族の館跡とも。井戸跡が残っているというが、高さ10数メートルを超える木々の森だ

ここは里山！

「毎年2月の第3日曜日に山焼きをやって草原の景観を保っています。住民やボランティアによる火の管理です。昔から人が草を刈りに来ていた場所。かつては牛を使っての農耕ですから、草は餌でもあり、田畑に入れる肥料でもあり……。

今も利用する人はいます。1反の田んぼに草原1反分の草が必要です。今じゃ取り合いにはならないですが、以前は、集落単位で草場の持ち分ははっきりしていました」

ガイドの吉松さんが解説をしてくれる。

ここが草刈場!?

一般的に草刈場は比較的標高の低い身近な場所にあるもの。観光地のイメージのせいか、暮らしから遠い場所と思い込んでいる。標高を尋ねた。

「秋吉台の平均標高は250mです。最も高いところで425mですね」

――それじゃ里山といいますか、ふつうに雑木が生い茂るような……。

「そうです。原生林が残されています。向こうのこんもりとした森『長者ヶ森』です」

吉松さんが指さす方向を見る。草原の奥に深い緑の塊がある。保存されてきた一角だという。タブノキ、クヌギ、ヤブニッケイなど、植生が約70種にも及ぶかなり立派な森らしい。それがここの本来の姿だ。

秋吉台は、人が原生林を伐採し、草刈場を育て、現代へと続く毎年の山焼きによって広大な草原を維持してきた場所だった。

ちなみに日本三大カルストの残りの2つ、「四国カルスト」の標高は1000～1500mとかなりの高地にあり、「北九州・平尾台」は370～710mだ。

秋吉台の標高200～400m辺りというのは、まさに里山の標高を思わせる。そのなかでも今回注目しているのは、カルストならではの農地だ。「ドリーネ畑」「ドリーネ耕作」と呼ばれるカルスト台地特有のくぼ地の農地へ足を運んだ。

ドリーネ畑へ

長者ヶ森近くの駐車場で車を降り、カルストの遊歩道を歩き出す。長者ヶ森と同種の木々を県が植林保全している一角を抜けると、広大な草原の谷に迷い込んだかのようだった。真っ青な空の下、ここは大陸の高原か、何処（いずこ）の海外か……と見まごう草原の乾いた起伏の底で、その農地はひっそりと点在していた。

白い岩が飾る広大な緑の丘陵のすり鉢状の底に、小さく丸い赤茶色をした畑がぽつんと見える。1つ、2つ、3つ、4つ……。ここに、そう数はない。

1940年代の調査では、秋吉台にこうした「ドリーネ畑」は、1583カ所という結果だったそうだが、今は数カ所という。

「ドリーネ」とは、石灰岩のくぼ地のこと。地元では昔から「くぼ地」と呼んできた。そこを畑にしたものは「くぼ畑」である。ガイドの吉松さんはこう話す。

「雨は、石灰岩を溶かしてドリーネへと集まり、そこから地下へ流れ落ちていきます。ドリーネの下には縦穴ができているんです。ですから地表に水はなく、農業自体は難しい場所です」

秋吉台の表土は、独特の赤褐色をした土壌だ。これは、石灰岩の溶け残った成分でできているといわれていた。だが、近年の研究の進展により、主に風に乗り大陸から運ばれた黄砂などが、長い年月をかけて積み重なってできたものであることがわかってきた。

秋吉台でのドリーネ耕作は、江戸・明治時代にはずいぶん盛んだったようだ。だが、1963（昭和38）年発行の『秋芳町史』にすでに「今ではほとんど耕作されていない」と記されている。

小規模で重労働を要するドリーネ畑は、高付加価値をつけなければ維持は難しい。耕作者はもう数軒のみというのが現状だ。

ドリーネ畑の政子さん

丸い畑のなか、作業をする一台のショベルカーが見えた。

草原の丘をどんどん下り、すり鉢の底に辿り着く。畑はグラススキーでも楽しめそうな緑の斜面にぐるりと囲まれている。

暗赤褐色をした畑のなかは、手前から奥へと植えられたごぼうの畝に沿って、長く深い溝が掘られていた。人が腰や胸辺りまですっぽりと入って、作業ができる深さだ。

畑の奥で重機を止めて降りてきたのは、頬被りをした小柄な女性だった。

「青少年自然の家のごぼう掘りがあって4列掘ったそ。今は溝を埋めよった。体験100人用で4列。ごぼう引くのはえらい仕事よ。うちは慣れとるけどね。でも、もう（受け入れは）今年でやめる」

宅間政子さん、昭和23年生まれの75歳は、淡々と話し出した。

「前はトレンチャー（掘削機）で掘ってた。昭和47年に嫁に来たけど、そのころは熊手で1本ずつ掘ってやりよった。えらかった（きつかった）。くえる（崩れる）から深掘りしてねえ。ずっとお父さんは勤め人じゃったから、ここはじいちゃんばあちゃんとわたしの3人。重機の免許は40代で取ったよ。50になる前にお父さんと一緒にね」

Mine秋吉台ジオパークセンター「カルスター」内にて、認定ガイドの吉松三男さん（右）と、美祢市教育委員会事務局世界ジオパーク推進課専門員の小原北士さん（左）。小原さんには、本記事全体を通し、最新知見による助言をいただいた。御礼申し上げます。

宅間政子さん。「えらくて嫌だったけれど、子どももいて、熊本には帰らんやった」と言う。お父さんのことを尋ねると「まあまあ男前やったからね」と恥ずかしそうに肩をすくめる素敵な女性

この日、夫の恒雄さんは通院の日で姿はなかったが、定年後はふたりで畑に出てきた。

一見ごろごろとした暗赤褐色の土に触れてみる。ごわっと固い。しかも重い。粘土質とはいえ、柔らかい粘りではなく、どこか、ごわごわとした野趣溢れる手触りだ。この土の圧力で作物は押されながらゆっくりと育つ。ごぼうであれば、きめ細かで柔らかくなる。一方、重く固い土は手強く、働く者の肉体への負荷も半端ではない。

ブランド・美東ごぼう

「ごぼうは連作がならん。連作障害があって、最低4年は空ける。長く空けたほうが、なかが黒くならんのよ。ごぼうばかり作ると、海苔巻きみたいになかが黒くなる」

2023年10月14日に山口県秋吉台青少年自然の家が主催した「ドリーネ畑でごぼう掘り」のようす。中央で指導しているのが、宅間恒雄さん（撮影:水土里ネット山口）

畑の横にうっちゃられていた、先日掘ったと思われるごぼうを拾い、なかを割りながら政子さんが言う。ぽきっと割ると、白いごぼうのなかに黒いわっかができているものがあった。

ドリーネ畑は、ごぼうや里芋など根菜類が多いそうだ。ごぼうは水のないこの地に適している一方、里芋は水を好むだけに水を逃がさない工夫が必要だ。

「4年に1回、ごぼうにするのがちょうどいい。里芋や家庭用の大根を植えたり、肥料になるから牧草を植えたり。里芋のときは絶対、草を入れにゃいかん。草で、カヤで湿気を保つ。植えてから草で覆う。土が乾かんようにするためよ」

畑には周囲の草を刈って漉き込むのだそう。そうすると翌年、土が「優しくなる」という。先祖代々、おそらく気が遠くなるような昔から手刈りで大量の草を漉き込みながら土を作ってきたのである。

政子さんが、ごぼうのなかを割って見せてくれた。なかには輪っか状に筋が入るものも

ごぼう掘り体験をさせてもらった。2人で一組。一人は「つく棒」と呼ぶ鉄製のT字型の杭をごぼう手前の土中に指し、腕に体重を乗せながら、ごぼうを溝の方へ押す。

もう一人は、溝に降りて、ごぼうを丁寧に引き抜く。が、土は重く、一筋縄ではいかない。「息を止めて引っ張らんと！」と政子さんの叱咤激励の声が飛ぶ。慎重に引っ張らないと抜けきらないうちに、ぱきっと折れてしまうのだ。

ごぼうは「長さがないと商品にならん」という。最も良い「特選」は65㎝とのこと。短くても30㎝からだ。

こうして収穫されたごぼうは、「美東ごぼう」というブランドで大人気である。政子さんにおすすめの食べ方を聞くと「天ぷら。かき揚げが一番おいしい。正月には酢ごぼうやね」と返ってきた。

ごぼう掘り作業。溝に入っているのは、ガイドの吉松さん。溝は重機で掘るが、ごぼう掘りは手作業で重労働だ

嫁にやってきた政子さん

政子さんの実家もごぼう農家だったのだろうか。尋ねると、手を横に振る。

「嫁に来る前は、農業したことない。実家は漁業で海苔やってた。学校卒業して勤めて、漁業もやったことない。有明海の海苔よ。熊本の」

失礼とは思いながら、山口県のカルスト台地の農家と、有明海の漁業者の娘がどうやったら出会うのか、知りたかった。

「いや恥ずかし。熊本の女の先輩が雑誌で文通相手を山口県に見つけて。それがお父さんの職場の先輩。先輩同士が文通やってて、後輩をそれぞれ紹介したわけ。先輩らは一緒にならんかったけどねえ。

結婚するまでこの畑は、見てない見てない。知っとる人は嫁には行かん。知らん人が行く。結婚前に秋吉台に来たけど、見てないよ。雪が降って積もってて。雪に憧れたのよ。熊本はちらちらしかせんもん。積もったまっさらな白い雪に足跡つけて……。でも、今じゃ雪が大嫌いになった。雪降ったら、かかないかん」

政子さんは、実家から離れた地で子ども3人を育てながらドリーネ畑に出てきた。かつては朝5時前から2トン車いっぱいに白菜を積んで、独りで宇部へ出荷もしてきた。あまりに疲れて、土手に乗り上げてトラックをひっくり返したこともある。

既に成人した子どもたちは、農作業の手伝いはするものの、継がないだろうと話す。

ドリーネ畑に刻まれた人生にほんの少し触れる。ここには古より、いったいどれだけの人生が刻まれているのだろう。感謝と敬意がこみ上げてくる。深く頭を下げた。

白水の池と別府弁天池

ドリーネ畑を後にして、旧秋芳町にある、白水の池と別府弁天池を訪ねた。白水の池は秋吉台周辺に、別府弁天池は花尾山に降った雨が地下へとしみ込み、それらが再び地表へと湧き出で、神秘の色を湛えた池を生みだしている。地球の営みによるものであり、いずれも農業用水として地域の要でもある。

まず、白水の池へ。山際にあり、奥の鍾乳洞から白濁した水が流れ込んでいる。辺りは清涼感に満ち、池のなかには水神様を祀る石の祠が建てられていた。

一方の別府弁天池は、池の底からこぽこぽと水が湧き、透き通った青い水を湛えていた。コバルトブルーやエメラルドグリーンに見えるその蒼さは、まさに神秘的だ。これは、水に含まれた石灰分が透過する数々の光の色を吸収し、わたしたちの眼に青のみを留めて見せるためだ。このミネラル豊富な水が作物を美味しくするという。

ドリーネ畑がある旧美東町はごぼうで有名だが、白水の池や別府弁天池がある旧秋芳町の特産は梨。収穫シーズンになると、あっという間に売り切れになる。水はけの良い土壌で育つ梨はとにかく甘いのだ。

秋芳町土地改良区の事務所で話をうかがった。理事で、別府地区で農業を営む飯田晃さん72歳が、弁天池から流れる用水路について教えてくれた。

白水の池。中央に水神様が祀られている。秋芳町土地改良区事務局長の佐々木彰宣（あきのぶ）さんは、白水の池の水を利用し、農事組合法人「カルストの里」を立ち上げている。米を中心に麦、大豆。ほ場整備後の農地を活かし、法人が、同改良区内で7団体。農業が盛んなのも豊富できれいな水があってのこと

ドリーネ畑。県内でも秋吉台のカルスト台地内の畑はあまり知られていない

井手川（水路）の分水地点にある「やた」。細い笹を束にして、かずらで縛る。これで水路を塞いで水量を調整する。一ノ井手川（写真中心）の幅は、約1.5m、二ノ井手川は50cmの幅だそう

「弁天池からは、一ノ井手川から五ノ井手川まで出ています。一ノ井手川から二ノ井手川が分かれていますが、ここは今も昔ながらの『やた』で水を調整していますよ」

別府弁天池の一帯は、別府厳島（いつくしま）神社の境内となっている。その一角に分水地点があり、そこに葉を除いた細笹の大きな束が横たえてあった。水はそのわずかな間を通る。かつてはどの分水地点でも「やた」で水路を塞ぎ、流す水の量を調整していたという。だが今は、弁天池そばの「一ノ井手」と、「二ノ井手」の2カ所のみだ。「『やた』は5月15日に設置して、1年間そのまま。誰も触ってはいけないんです」

しかも井手の水は、生活用水だと飯田さんは言う。井手川に面して洗い場が設けてあり、今も野菜などの農作物を洗っているのだとか。とはいうが、決して水が豊富にあったわけではない。昔から地区間での水争いははげしく、細かい水利慣行が敷かれてきた。「やた」はその象徴的存在でもあり、地元は、農地整備後も伝統の知恵を2カ所だけでも残すことを望んだのである。

最後に秋吉台に建立されている塔の話をして締めくくろう。1957（昭和32）年、秋吉台のなかに「平和と観光の塔」が建立された。ガイドの吉松さんはこう話す。

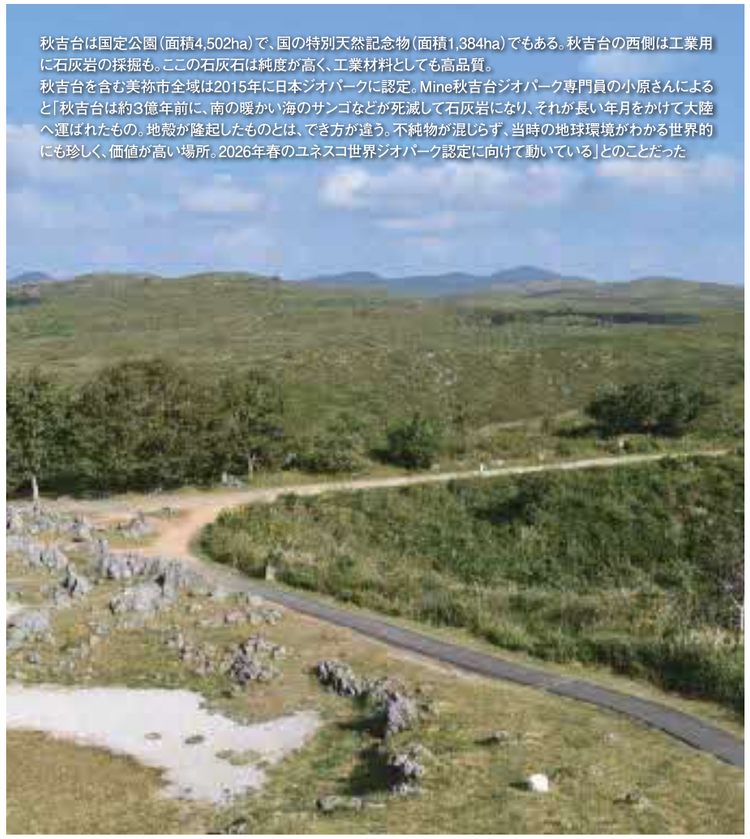
「秋吉台には明治から終戦まで旧陸軍の演習場があり、戦後11年間は連合軍の演習場でした。1955年に米軍から在日米海軍航空部隊による対地爆撃演習地にしたい旨の申し入れがあり、それに地元は猛反対し、秋吉台の価値を訴え、ここを守る運動が起きたのです」

その結果、今の秋吉台がある。専門家とともに住民たちの力で、古（いにしえ）からの里山空間を守ったのだ。そんな伝統がここにはある。

今も続く山焼きもその一つだろう。自分たちで風景を作り守る伝統だ。今後は「ドリーネ耕作」も守っていけるだろうか。もはや耕作地が数カ所となったドリーネ畑は、秋吉台ならではの耕土なのだから。

今や、ビルの一室の電光で野菜が育つ時代だが、それだけに、人類が地球のダイナミズムのなかで育んだ農業を忘れてはならないと思えた。

別府弁天池。周囲40m、水深4m。水は集落内や田畑を巡ったあと、厚東川に流れ、瀬戸内海へ流れ込む。弁天池のほとりには、集落経営の料理屋が建つ。隣の市営養鱒場にある釣り堀で釣った鱒も料理してくれる。清い水で育つ鱒は臭みがなく、白身がふわふわ



秋吉台は国定公園（面積4,502ha）で、国の特別天然記念物（面積1,384ha）でもある。秋吉台の西側は工業用に石灰岩の採掘も。ここの石灰石は純度が高く、工業材料としても高品質。
秋吉台を含む美祢市全域は2015年に日本ジオパークに認定。Mine秋吉台ジオパーク専門員の小原さんによると「秋吉台は約3億年前に、南の暖かい海のサンゴなどが死滅して石灰岩になり、それが長い年月をかけて大陸へ運ばれたもの。地殻が隆起したものとは、でき方が違う。不純物が混じらず、当時の地球環境がわかる世界的にも珍しく、価値が高い場所。2026年春のユネスコ世界ジオパーク認定に向けて動いている」とのことだった

秋芳町土地改良区がある美祢市の支所前で、理事の飯田晃さん（右）と事務局長の佐々木彰宣さん（左）。「地域の子どもはもう以前の10分の1に減ってしまった」と、飯田さんが話していたのも印象的

◉巻頭特集

やまぐちの「農の偉業」探訪⑨

岩国市錦町向峠（むかたお）

山際を走る水路が村を育む向峠神楽の弾ける夜に

取材・文：石井里津子

集落の南東、小水力電力が行われている場所から小五郎山方面を見た光景。コスモスは向峠土地改良区の斉藤副理事長が植えたものだ

2024年10月26日、夜も8時半を過ぎると、黒い夜空に包まれた剱霊（けんれい）神社へ人影が集まってきた。灯された神楽殿の光に吸い寄せられるかのように、神楽奉納の時刻に合わせ、大人も子どもも暖かな服装をして鳥居をくぐって来る。

舞台の上下（かみしも）の袖や、パイプ椅子を3列に並べた観客席の周囲など、三方にいつしか人だかりができていた。

今回の物語は、山口県岩国市錦町向峠（ひかたお）。旧錦町の中心部から約20㎞北上する。島根県境に位置し、現在、50戸弱の世帯が暮らす山あいの集落である。特筆したいのが、向峠で継承されている「向峠神楽」。島根県石見（いわみ）地方の「石見神楽」を取り入れてあり、ダイナミックな演出と華麗な舞いに定評がある。

向峠神楽は江戸時代末期、向峠水路の開削に感謝し、その歓びを神様へ届けようとはじまったという。今も、その歓びを弾けさせ、地域全体を包み込みながら神楽を奉納する夜がある。それが地元の氏神、剱霊神社の秋祭りの前夜だ。

水路や神楽が、どう地域をつなぎ、いかなる核であるのか――。今日はそんな話を見ていこう。向峠土地改良区理事長、安村勝利（かつとし）さんが、神楽奉納の前日と当日という多忙な時にもかかわらず、身体（からだ）を張って向峠全体を案内してくれた。

集落の南端、北向きに位置する剱霊神社。文亀元（1501）年建立。「向峠の開拓の崇りを鎮めるため、平家伝来の宝剣を収めた」という。本殿の西側に神楽殿があり、神楽が奉納される

冬季水回札。水路の見回り用のノートが括りつけてある。
写真人物が向峠土地改良区理事長、安村勝利さん（昭和19年生）

集落全戸で支える向峠水路

「毎日、水当番が水路の見回りをしちょるんです。全戸が水当番を務めます。水路を確認したら、この木の板と日誌を次の人に渡して行くんですよ」

挨拶もそこそこに、安村理事長から話を聞きはじめると、黄色いロープで持ち手をつけた、大きめの木製の板が出てきた。横幅は50㎝はあるだろうか。厚みは1㎝ほど。

横長の板には、横書きで大きく「冬季水回札」とあり、その下に縦書きで集落内の個人名がずらりと並んでいる。非農家も含め、全世帯主の名だという。全戸50名弱分。書かれてある順に右から左へ、水当番が回っていく。数名おきに土地改良区の役員9名がちゃんと入っている。

板の最後には、「此の札回は安政三年（一八五六）から区民によって続けられている命の見回（みまわり）です」という文言がある。水路が開かれてから約170年。その間、休むことなく続けられてきた営みだ。

「冬季水回札」には、B5の大学ノートが紐で括りつけてあった。見回り日誌である。なかを開くと「異状なし」「やや少なめ」「落石、落木多少あり」といった記述が目に入る。

高齢の人などは家のすぐ裏にある分水口を確認すれば良いなど、チェックポイントは、互いの状況を思いやって決められているという。ちなみに最高齢は96歳。高齢になっても地域の一員として、大事な役目を果たせる。

数日おきに組み込まれている役員は、取水口から末端まで幹線水路を確認する。夏場は、役員9人のみで順番を回し、水路全体の見回りを毎日行うという。

こうした170年近く続く水当番に対し、これまで反対の声は上がっていない。

「水を忘れちゃいけんけ、（水当番制度は）ずっと続けていこう、って誰もが思ってるんじゃないかな」

毎年4月第1日曜日は「井手さらい」が行われる。2時間ほど全戸でスコップなどを持って水路掃除に汗を流す。7月第1日曜日は「井手刈り」。全戸が自前の鎌を手に集まる。驚いたことに草刈り機は使わないように伝えているという。

「草刈りしながら話をするのが目的ですけ。『できるだけ、鎌でやってくれ。ゆっくり草刈りしたらええけ。滅多にみんなで会わんのじゃけ』って言うんですよ」

その言葉に、はっとする。草刈り機が出すエンジン音に、黙々と単独でできる作業形態が脳裏に浮かんだ。が、鎌で手刈りをすれば、ともに作業に出た人との会話を楽しむ余裕ができる。効率化がもたらすコミュニケーション不足は、人間関係をこじらせることもあるだろう。向峠では、それを回避する手立てが水路管理のなかに組み込まれていた。

向峠は水のなかった平坦地

向かう峠と書いて「むかたお」と読む。江戸中期の史料「地下上申絵図」では「垰」と読む「向垰」の表記だが、現在は「峠」の字が当てられている。「峠」は、山道を登りつめ、下って行く場所を指す。一方「垰」の字が示すのは「連なった山の峰と峰のくぼんだ所」（＊1）である。

向峠の地形を眺めると、後者の印象が強い。山口県錦町から島根県へと抜けていく意味では「峠」なのだが、地形は山と山のあいだに広がった平坦地である。

向峠は、1162mの小五郎山の南麓の裾野、標高約400m前後に開かれている。集落の東を流れる宇佐川、西を流れる深谷川とも100mほど下の谷底を流れており、向峠水路ができるまでは川の水を利用できなかった。

水が乏しいのは「河川争奪」と呼ばれる自然現象によるもの。200～300万年前、1337mの寂地山からの水は、向峠を通り、深谷川と合流したのち、島根県のほうで高津川となって日本海へ流れ出ていた。向峠は、かつての川底にあたり、平地が形成されていたのである。

それが向峠の平地部を囲むように断層が生じ、深い谷が形成されていく。水の流れは、錦川へと移り、瀬戸内海へ向かうように。この変化が「河川争奪」と呼ばれる現象だ。こうして向峠は、平坦地が広がっているにもかかわらず、川は深い谷底を流れ、水のない台地となった。

長禄元（1457）年に開墾がはじまり、明応8（1499）年には、大々的に畑として開拓されている。とはいえ、米は取れず、決して豊かな村ではなかった。

天保7（1836）年の大飢饉で、餓死を含め約130人もが亡くなっている。この大惨事を機に、天保14（1843）年、水路開削の工事が着手された。約5km北上した深谷川上流の金山谷からの取水だ。集落の背後に聳える小五郎山の南麓の山腹に沿って水路を掘り進め、水を流し、たぐり寄せた。

13年かけて完成した向峠水路

向峠水路は、庄屋の山田利左エ門が村人を率い、13年もの年月を費やして安政3（1856）年に完成した。

北を上にして、鳥の目のように眺めれば、水路は小五郎山を縁取るように走り、平仮名の「し」の字を描くように流れている。「し」の字のように、水路の流れは、取水口から約4km南へ（下へ）下り、向峠集落に到達すると、東へ（右へ）と舵を切り、1.5kmほど弧を描く。そのカーブ部分の下側、つまり南側に、東西横長に広がる平地が、向峠の農地であり、集落である。

水が集落内を流れるあいだに、枡を設けた16箇所の分水口がある。幹線から流れてきた水は、櫛状に16本の支線へと落ちていく。こうして現在約46haの受益地の隅々まで水が行き届くのだ。

安村理事長の軽トラックに乗せてもらい、下流側から取水口まで2日間に渡って、案内してもらった。4号の分水口までは水路に沿って約3m幅の舗装道路が一本通っている。民家があり、消防ポンプ車が通れる幅が考慮されている。

水路の沿道は約3mの幅がある。消防のポンプ車が通れることを考えての道幅。水路沿いを散歩する89歳になるという散歩中の女性に出会う。ちなみに、分水口の6号と7号の距離は近く、50mほど

集落の西側では、対岸の島根県の集落が見える（写真右奥）。吉賀町初見新田、田野原。以前は、木製の簡易的な橋が深谷川にかけてあり、15分もあれば、歩いて行けたとのこと

ちょうど取水口から水が運ばれて4km地点辺りで、パイプラインのなかを水が流れているか確認できる箇所がある。下に発砲スチロールの浮きをつけた棒（幕の柄の再利用）を水路に浮かべてあり、この棒の目印の位置によって、パイプ内の水の深さが外からわかる仕組みだ。水の深さは15～19cmのところが良い。このアイデアも安村さんによるもの

岡足谷（おかあしだに）。「おくあしだに」とも呼ばれる。「奥」「悪し」「谷」が転じた可能性のある地名だ。水が勾配の強い岩肌を流れ、5段ほどの白い滝となって落ちていた。そこをまたいで水路を渡してある。樋の口や岡足谷あたりには、蝶のオオムラサキが棲息しているとか

取水口。「金山谷ダム」。川の向こうは島根県。測量で基点を定め、堰の高さや大きさを決めてあるが、昔から島根県側と話し合いがなされ、水の権利の合意があり、今もそれが変わらないという

現在、取水口から1号の分水口までは、パイプライン化され、それ以降は開水路だ。コンクリート板や網状の天板で覆う箇所を少しずつ増やしてきた。

「水路を見回るときはいつも4つの道具を持ってね。三角鍬、鎌、鉈、そしてチェーンソーね。倒木が道を塞いでいたり、水路に落ち葉が詰まっていたり……」

軽トラックの荷台には、これらが積み込んであった。三角鍬は、水路の落ち葉などをすくい上げるという。水路の見回りの「七つ道具」ならぬ「四つ道具」に、水路管理の大変さを垣間見た。

取水口「金山谷ダム（向峠頭首工）」と分水口1～16号

遠目から見ると、穏やかな田園風景が広がる向峠だが、水路を見るために、山の中腹へと足を運び、奥へ奥へと、上流に進んで行くにつれ、印象が変わっていく。木々が生い茂る森は深みを増し、聳える岩壁や、小さくとも鋭くえぐられた谷沢が幾つもある。落石する場所も多々あるという。

山肌にへばりつくように掘られた水路に、先人の執念のようなものすら感じる。険しい谷が幾つあろうが、なんとしても一本の水の道を下流へつなぐんだ、という強い意志が刻まれていた。

江戸時代の工事の苦労話も残っている。たとえば「樋の口」という谷は、硬い岩石のため、木管をつないで水路を渡そうとしたものの、水圧に耐えられずに破壊。そのため、干した芋のつるを岩の上で焼き、柔らかくすることで岩を掘り、難所を突破したという。

水路は、改修を重ねて現在に至る。大きな工事では、大正13（1924）年、全水路をコンクリートに変えている。昭和後半からは、いくつもの県営整備事業によって、修理や浄水場などが手がけられ、平成に入ってからは、上流部のパイプライン化が進んだ。

用水路からの導水で簡易水道が完成したのは、昭和62（1987）年。平成29（2017）年には、小水力発電も開始し、電力会社に売電するようになった。

最新の水路改修等は、平成26（2014）年にスタートした「中山間地域総合整備事業」によるもの。令和3（2021）年、ようやく事業を終えた。現場工事を担当して、地元目線で設計し、後世に続くよう采配を振ってきたのが、安村理事長だった。工事を請け負った地元業者勤めであり、現場監督という責務を担ったのである。この役割がドンピシャ。地元や向峠水路を知り尽くした人物である。かゆいところに手が届き、経費を抑えた無駄のない、現状に即した設計ができた。

だから、現代の向峠水路では徹頭徹尾、地元が利用しやすく管理しやすい設計にこだわってある。それは、江戸時代に創意工夫によって水路を掘り進めた気概を受け継いでいるようにも見えた。

小水力発電は、旧向峠小学校（現在、通信制の松陰高校）の東側にある10号分水口から最後、深谷川へと落ちる水で行われている。 月に2万5～7千円ほどを中国電力に売電している

向峠神楽と向峠神楽保存会

そして、向峠水路を語る際に忘れてはならないのが向峠神楽である。水路の開通を歓び、奉納されるようになったのだから。

向峠神楽は、水路完成に合わせ、安政年間（1855-1860）にはじまったという。芸州に縁を持つ青年に近隣に伝わる「山代神楽」を習得させ、地元の若者に教えたのがはじまりだ。

さらに大正初期には、石見神楽を取り入れた。豪華で艶やかな衣装や面などの費用のために「舞子頼母子講」を作って、継続させてきた。

向峠神楽保存会に所属しているのは、2024年度は18名。40歳代が中心だ。うち高校生が2名。高校1年生と2年生だ。2023年、2024年と続けて、1名ずつ入ってきた。

「毎週水曜の夜、4～5時間の練習をするから、高校生にならないと入れない。熱心だよ。そう。神楽は楽しいんだよね」

目を細めて語る安村理事長は、向峠神楽保存会の会長でもある。自身は、昭和47（1972）年に保存会に入ったというが、その頃はメンバーも減り、地域の奉納のみで辛うじてつながっていた。

それが今ではハワイ、台湾、韓国、イタリアといった海外公演の実績も持つ。県内外のイベントなどで得る公演料は、衣装や面をはじめ、小道具へと変わる。これらは、専門店に発注され、手仕事で作られているが、70万円、100万円……と高価な品々ばかりだ。

地域の子どもたちが、怖い面をつけたあやかしたちに連れ去られて、大泣き。裏に引っ込むとすぐに家族のもとへ

神楽殿の両袖には観客席がある。そこからの眺めはまた一風違っている

準備は自分たちの手で行う。天蓋の飾り付けも、弓矢や光輪といった小道具もその場で色紙を切り、糊で貼り付け作成する。破って登場する障子の貼り付け、絵柄描き……。手慣れた手仕事ぶりに目を見張る。取材した日も、夜の奉納に向け、午後から着々と準備が進んでいた。

人が育ち、コミュニティ力が育まれる

夜の剱霊神社にトントン、トンと、小気味よい締太鼓の音が響き渡った。柔らかな笛の音が辺りを包み込む。合わせ鉦に大太鼓。神楽殿の横では、たき火が橙色の火の粉を宙に散らしている。

神職とともに拝礼を行う神事のあと、神楽は、場を清める演目「潮祓」ではじまった。二人組の舞人のうちひとりは、高校2年生。息のあった舞いで、清めの大役を担う。

続く演目「八幡」では、武勇の神を高校1年生が演じきる。若い二人とも見事に神楽のリズムや身体の使い方を身につけており、美しく、凛々しく、端正な舞いを披露する。深く腰を下げ、向峠の地をしかと踏む姿は頼もしかった。

奉納は、儀式的な演目からはじまり、徐々にエンターテインメント性を帯びてくる。向峠神楽の舞は、動きが激しい。片足を軸にくるりと回り続けるなど艶やかな衣装の動きもダイナミックだ。

複数の舞人の出る演目では、いわば自転と公転を組み合わせた円陣の舞いによって神楽殿に渦の風が巻き起こり、辺り一帯を熱気で包み込んでいく。

向峠神楽保存会の会長でもある安村理事長が、演目「大蛇」では、豪華な衣装に着替え、翁として登場。圧倒的な存在感を示していた

演目「大蛇」では、天井に届くほどの高さにもなる大蛇の口から花火が出たり、目が光ったり。スモークもたかれ、見応え十分。子どもたちは大蛇をやっつけん、とおもちゃの剣を構え、神話の世界に入り込む

「客席に飛び込んでいくよ。観ている人と一緒になって楽しむ神楽が向峠神楽」と安村理事長から聞いていたとおり、たとえば、演目「黒塚」では、妖婦となった狐が、観客席に降りて駆け回り、小さな子どもを見つけると抱きかかえ、舞台へとさらっていく。怖い神楽面と向き合い、泣き叫ぶ子ども。そんなやりとりも会場を沸かせる。

また、ひょっとこ面といった滑稽役などの、舞人たちそれぞれの卓越した演技にも目が釘付けだった。

一方、舞台の前では、3歳ぐらいから小学校低学年あたりと覚しき小さな剣士たちが、おもちゃの剣や、少し大きな少年にその場で作ってもらったバルーンアートの剣を各々手にし、かぶりつきで怪物たちをやっつけようと身構えている。ちゃんと神楽に参加しているのだ。

最後の演目「大蛇」では、舞台下から子どもたちも、須佐之男命とともに大蛇に剣を叩き付ける。小さな剣士たちも、必死で里人や村を守っている。

いつしか神楽の世界が拡張し、神様の笑いが村を包み込んでいた。9時からはじまった神楽も、あっという間に12時を超え、終了は真夜中の1時を回っていた。

向峠には神様とともに、自然を畏れ敬い、安心して笑える時間が流れていた。子どもたちはそれを体感し、のびやかに育つ。そんな豊かな成長を見守る先輩や大人たち。そんななかで、それぞれの役目を果たしていく。

水路、神楽、水路管理、人、歴史、山、神社……。向峠では、これらすべてが有機的につながっている。この有機的なつながりは、一朝一夕にはできるものではない。つながりの糸は、意識して紡がれてきたのだ。そして今も向峠では、人と人の確かなつながりが、雲が湧き立つように新たに生まれている。水路や向峠神楽という伝統を核にしつつ、アップデートし、さらにそれを包む込む寛容さと、しなやかさがあってこそである。

＊1：漢字辞典オンライン

【参考文献】

『錦町史』錦町史編さん委員会 昭和63年 錦町発行

『錦町史 民俗編 山と里と人と暮らし』錦町史編さん委員会編 平成7年 錦町発行

『山代地方の神楽』山口県教育庁文化財保護課編集 平成17年 山口県教育委員会発行

『むかたお』恵本洋嗣著 2005年 向峠澄川盛信宇兵衛道喜を考える会発行

「『むら・人・くらし』の聞き書き集～岩国市錦町」平成28年 山口県発行

「わたしたちのきょう土 にしき」錦町社会科副読本編集委員会 錦町教育委員会発行

「錦川 第六号（小五郎山と向峠台地の伝説について 恵本洋嗣）」錦川編集委員会編 平成5年 錦町教育委員会発行

須佐之男命が村を襲う大蛇を倒す八岐大蛇の神話。6体の大蛇が神楽殿を暴れ回る。くるくると長い胴体を操り、生きもののよう

食料・環境 ふるさと写真コンテスト

一般の部

入賞入選作品のご紹介

山口県内の農山村の良さを再発見していただこうと「水・土・人・くらし」をテーマに、平成11年度から始まった『食料・環境・ふるさと写真コンテスト』。新しく生まれ変わった令和7年度は、9月から12月にかけて募集を行い、県下各地から農山村の風景や生き物、人々の営み、伝統文化などを撮った404点の作品の応募がありました。

素晴らしい自然や文化が数多く残る農山村は、まさに私たちの、そして生きものたちの心通うかけがえのないやすらぎの地、次世代に残していきたい宝です。入賞作品26点をご紹介します。

Prize

山口県知事賞

『挑戦のジャンプ』 周防大島町

木村 一雄（柳井市）

ここ周防大島町久賀で、温州みかん共同栽培中の河口さんと葉若さんの二人は、多くのみかんの耕作放棄地の開墾再生に汗を流し、おいしい温州みかんを生産してきました。さらに山口県のみで栽培される、希少な柑橘〔せとみ〕210本を、令和5年3月に植え来年2月頃の収穫にこぎつけました。
お二人は大島一のみかん園を夢見て頑張っています。 がんばるぞ！

Prize

水土里ネット山口会長賞

『見守り隊』 山口市阿知須

政村 美恵子（下関市）

阿知須のヨシ焼き、春を呼ぶ行事です！

Prize

山口新聞社賞

『満開の花畑』 山陽小野田市埴生

谷野 隆（山陽小野田市）

花や野菜を育てている施設でこの日は花が満開で夕日に照らされてキレイでした。

Prize

中国新聞防長本社賞

『ちょうちょ、待って！』 山陽小野田市埴生

秦 保博（宇部市）

花の海で、コスモスとアサギマダラを撮っていたところ、可愛い女の子が虫取り網を持ってアサギマダラを追いかけていたので、お母さんの承諾を得て撮影しました。

児童・生徒の部

優 秀 賞
『牛』 中野地区
松永 丈（山口市立秋穂小学校・６年生）

牛がカッコよかったのでインパクトのあるしゃしんがとれました。

最優秀賞
『おこめとったどー！』 山口市平川
竹之内 初（山口市立白石小学校・１年生）

ひがんばなもきれいだった

入　選

『龍の神』 弥富畳ヶ淵
野村 岬希（萩市立育英小学校・4年生）

これは、たたみがふちの龍神様で昔から願いをかなえてくれるとも言われています。初めて見てすごいなーと思いました。

『ひいおじいちゃんの田んぼ』
湯本四ノ瀬
竹元 晴彦（長門市立深川小学校・2年生）

いつもありがとう。

『秋のきれいな夕日』 家の庭
小谷 陽葵（山口市立秋穂小学校・6年生）

家からきれいな夕日が見えたのでとりました。

『楽しかった稲刈り』 吉田地区
岡本 真穂（下関市立吉田小学校・6年生）

去年もやっていて、2年目なので今年は刈りやすかったです。

『そばの花』 岩国市美和
村元 ふみか（岩国市立美和小学校・4年生）

きれいなそらとおはながきれいにとれたのでこのしゃしんにしました。

『そうぞうをこえるたたみがふち』
弥富畳ヶ淵
豊田 希蒼（萩市立育英小学校・3年生）

葉っぱがいい味を出していたし、石が大きくて行ってみると思ったいじょうにはくりょくがあってとてもよかったです！

『ＢＢＱの後』 家
篠田 彩夏（美祢市立秋芳中学校・2年生）

BBQが終わってみんなが帰る時にとりました。楽しかったです。

『鳥獣防護柵の中での畑作業』
下関市員光町のほ場
岡田 直也（防府市立佐波中学校・1年生）

祖母がイノシシ、シカ等の農作物被害も受けるため、設置した防護柵の中で、畑作業を行っている様子

『遊んだり、勉強したりした綺麗な道』
東行庵
曽我 美光（下関市立吉田小学校・5年生）

学校で勉強する時、ここで動画を撮ったり、ここで遊んだりした思い出の所だからここを撮りました。

『ＳＬ！』 徳佐長沢
北園 菜々（山口市立阿東東中学校・2年生）

毎週通るSLをせっかくなので撮ってみました。とてもかっこよかったです。

主　催／山口県・水土里ネット山口
後　援／山口新聞社・中国新聞防長本社

※学年は受賞当時のものです。

一般の部　入選

『僕も田んぼ守るよ』 山口市秋穂二島
村田 利子（宇部市）

手作りのかかし　今年人気のミャクミャクやあんぱんマン　かかしのポーズでのひとコマです。

『大きくなれよ』 下関市一の宮
黒木 丸生（下関市）

下関市の一の宮住吉神社御田植祭の様子です。
若者が大きくなれと言っているようでした。

『できたよ～』 自宅
山﨑 美津子（周南市）

今年はたくさんの柿が実りました。
美味しいつるし柿が出来ますように！

『ただいまダッシュ』 下関市菊川町
田中 輝（下関市）

姪が近所のお散歩から帰ってきた際の一枚です。田舎の綺麗な夕焼けと姪の元気な姿が印象的な作品になりました。

『春を待ってのヨシ焼き』 山口県きらら浜自然観察公園
安藤 和子（下関市）

春の芽吹きを待って　協力してヨシを焼く

『耐寒圃場』 山口市阿東徳佐中
米原 保男（防府市）

凍てついている圃場です。
この寒さに耐える時間が、土に力を蓄えているように感じ、撮影しました。

『春の花舞台』 下関市火の山公園
中川 憲次（長門市）

美しく管理された花と桜の咲く時期とがコラボして、みごとな花園にいやされました。

『棚田』 周南市
池田 隆夫（下松市）

稲刈り前の棚田で雑草の手入れ
おいしいお米がたくさんとれますように！

『勿体ない!! ブロッコリーの綺麗な花畑』 山口市秋穂二島
廣中 作次（下松市）

高騰していたキャベツを撮影しに行ったところ、隣の畑に私が毎朝食べているブロッコリーの採取されない脇芽が畑一面に綺麗に咲いていました。
勿体ない!!　採って食べたい気持ちを抑えながら撮影しました。

『自然回帰』 周南市石光（三丘温泉の両側の田んぼ）
木原 陽一郎（下松市）

「コウノトリが飛来」との情報を入手し、ウワサの地域を回った。5羽のグループを発見、遥しくエサを獲っていた。足に番号を付けているが野性味が戻ったようだ。

発行

やまぐち農業農村整備みらい会議 事務局

〒753-8501 山口県山口市滝町1-1 山口県農林水産部農村整備課内
TEL:083-933-3423 FAX:083-933-3429

〒753-0079 山口県山口市糸米二丁目13番35号 山口県土地改良事業団体連合会内
TEL:083-933-0033 FAX:083-933-0048

印刷インキは、環境にやさしい植物性油インキを使用しています。 令和8年発行 印刷：株式会社コア